
埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第98集

木の本3号墳

2009.3

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第98集

木の本3号墳

2009.3

深谷市教育委員会

卷頭図版 1



1. 石室完掘状況（填頂側より）



2. 騰出土状況



3. 銅鉢出土状況

卷頭図版 2



1. 銀



2. 銅釧・耳環

序

深谷市原郷から東方にかけて立地する木の本古墳群は、深谷市を代表する古墳群の一つであり、当地域の古墳時代を知る上で重要な遺跡であることから、埼玉県選定重要遺跡や深谷市指定文化財として保護が図られています。

この度、その中の1基である木の本3号墳が平成16年12月に所有者の方から深谷市に寄付されました。市では木の本3号墳を今後どのように保存活用していくかを検討するための資料とするために、平成17年度に確認調査を実施しました。本報告書はその成果をまとめたものです。発掘調査では、木の本古墳群で初めて石室の調査を行なうなど、地域史を明らかにする上で大きな成果が得られたものと確信しております。

本書が、学術研究だけでなく、学校教育や生涯教育の場において、地域の歴史学習や文化財保護の普及、啓蒙の際の資料として活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、旧所有者の方をはじめ、発掘調査から報告書作成まで多大なるご理解とご協力を賜りました関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

平成21年3月

深谷市教育委員会

教育長 猪野幸男

例　　言

1. 本書は、埼玉県深谷市大字原郷字木ノ本1975他に所在する木の本3号墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、深谷市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査期間は平成18年2月13日～3月29日までである。
4. 発掘調査は青木克尚指導のもと永井智教（現：鳩山町教育委員会）が担当した。整理作業は永井・幾島審が行ない、報告書の作成を幾島が担当した。文責は各文末に記した。
5. 遺跡の測量に関しては、技研測量設計株式会社の協力を受けた。
6. 木の本3号墳の石室から出土した歯について、春日部市教育委員会の長谷川清一氏より、玉稿を賜った。
7. 出土遺物は、深谷市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査から報告書作成に至るまで、次の諸氏のご指導・ご助言を賜った。
森田安彦、藏持大輔、宮元香織、藤井康隆
また、以下の方々は現場でお手伝いいただいた。
青木 敬（当時：専修大学講師、現：独立行政法人奈良文化財研究所）
草野潤平（当時：明治大学大学院修士課程、現：明治大学大学院博士課程）
石橋 宏（当時：國學院大学大学院修士課程、現：高崎市教育委員会）
福田桂子（当時：早稲田大学修士課程、故人）
阿部 恵（当時：早稲田大学学部生、現：早稲田大学大学院修士課程）

凡　　例

1. 遺跡原点は国家方眼座標X=21580.000、Y=-46980.000である。図面中の方位は、全て国家方眼座標の北を表示している。
2. 遺構土層図・断面図中の地山・未発掘部分は斜線のトーンで表現した。
3. 遺物の実測図は、須恵器の断面を黒塗りで表現した。
4. 遺物観察表の記載は、以下の通りである。
 - ・計測値の単位はcmである。
 - ・器径、器高で（）を付したもののは推定値である。
 - ・器高で残を付したものは、口縁部または底部からの残存値である。
 - ・胎土は肉眼で確認できた範囲での含有物を、以下のアルファベットで表した。
A…白色粒子、B…赤色粒子、C…黒色粒子、D…石英、E…角閃岩、F…片岩
G…白色針状物質、H…砂礫、I…雲母
5. 遺構・遺物実測図の縮尺は、適宜スケールで示した。

発掘調査の組織

発掘調査 平成17年度

教	育	長	青木	秀夫	
教	育	次	長	古川	国康
次		長	大澤	芳正	
事務局	深谷市教育委員会生涯学習課	課長兼			
		深谷市民文化会館館長	澤出	晃越	
		課長補佐兼施設係長	猪野塙	昇	
		文化財保護係長	青木	克尚	
		主任	畦元	直大	
		主任	知久	裕昭	
		主任	荻野	直美	
		調査員	永井	智教	

報告書刊行 平成20年度

教	育	長	猪野	幸男	
教	育	次	長	石田	文雄
次		長	中村	信雄	
事務局	深谷市教育委員会生涯学習課	課長	澤出	晃越	
		課長補佐	閔根	代次	
		課長補佐	吉場	厚仁	
		文化財保護係長	鳥羽	政之	
		主任	森下昌市郎		
		主任	宮本	直樹	
		主任	荻野	直美	
		主任	知久	裕昭	
		事務員	幾島	審	
		臨時職員	栗原貴世美		

調査参加者

伊藤 昌	市川喜和子	田端 英子	根岸 紀次	原口由美子	真下 祐司
吉野 智貴	小室 翔平	清水 徹也	野村 満	宮本 久子	(大正大学)
栗原 康多	平野 哲也	(立正大学)			

目 次

序

例言

凡例

発掘調査の組織

目次

I	発掘調査の経過	1
1	調査に至る経過	1
2	発掘調査の経過	1
II	遺跡の環境	2
1	地理的環境	2
2	歴史的環境	2
III	発掘調査の成果	11
1	古墳の現況と調査方法	11
2	各トレンチの調査所見	11
3	古墳の形状・規模	27
4	出土遺物	28
IV	結語	37
考察1	木の本3号墳の横穴式石室構造とその位置づけ	41
考察2	木の本3号墳出土遊離衛	52
写真図版		55
報告書抄録		
奥付		

挿 図 目 次

第1図	木の本3号墳と周辺遺跡分布図	3	第13図	木の本3号墳推定復元図	26
第2図	木の本古墳群と周辺の古墳	5	第14図	石室周辺出土遺物実測図	29
第3図	木の本3号墳位置図	6	第15図	古墳出土遺物実測図(1/5)	30
第4図	木の本3号墳丘測量図	7~8	第16図	古墳出土遺物実測図(2/5)	31
第5図	木の本3号墳全体図	9~10	第17図	古墳出土遺物実測図(3/5)	32
第6図	第1トレンチ平面図・土層図	13~14	第18図	古墳出土遺物実測図(4/5)	33
第7図	石室周辺遺物出土状況図・断面図	15~16	第19図	古墳出土遺物実測図(5/5)	34
第8図	第2・第6トレンチ平面図・土層図	17~18	第20図	トレンチ出土遺物実測図	35
第9図	第3トレンチ平面図・土層図	20	第21図	木の本3号墳石室復元図(模式)	43
第10図	第4・第7トレンチ平面図・土層図	21~22	第22図	荒川扇状地タイプの分類	45
第11図	第5トレンチ平面図・土層図	23~24	第23図	荒川扇状地タイプの分布	49
第12図	第8トレンチ平面図・土層図	25			

挿表目次

第1表 木の本3号墳と周辺遺跡一覧表	3	第6表 トレンチ出土遺物観察表	36
第2表 木の本古墳群と周辺の古墳	5	第7表 荒川扇状地タイプ各類の消長関係	47
第3表 石室周辺出土遺物観察表	28	第8表 年齢区分	53
第4表 古墳出土遺物観察表 (1/2)	34	第9表 出土した歯からの性別内訳	53
第5表 古墳出土遺物観察表 (2/2)	36	第10表 出土した歯の観察表	54

写真図版目次

卷頭図版 1	1. 石室完掘状況（墳頂側より）	2. 魚出土状況	3. 銅鏡出土状況	
卷頭図版 2	1. 魚	2. 銅鏡・耳環		
図版 1	1. 調査地風景	2. 第1トレンチ	3. 前庭部より石室方向	4. 前庭部状況
	5. 前庭部出土状況	6. 調査風景		
図版 2	1. 石室完掘状況（前庭側より）	2. 石室完掘状況（墳頂側より）	3. 東壁残存状況	
	4. 石室内遺物出土状況	5. 鉄鏡出土状況	6. 石室裏込め状況	
図版 3	1. 第2トレンチ	2. 第2トレンチ周囲土層	3. 第3・第6トレンチ	
	4. 第6トレンチ土層	5. 第4トレンチ土層	6. 第7トレンチ	
図版 4	1. 第7トレンチ土層	2. 第7トレンチ出土状況	3. 第5トレンチ	
	4. 第5トレンチ土層	5. 第5トレンチ周堀	6. 第8トレンチ	
図版 5	1. 石室内出土鉄製品	2. 古墳出土遺物1～9		
図版 6	1. 古墳出土遺物10～19	2. 古墳出土遺物20～27・36～39		
図版 7	1. 古墳出土遺物28～35・40～42	2. 古墳出土遺物43～52		
図版 8	1. 古墳出土遺物53～59	2. トレンチ出土遺物1～10・17・18		
図版 9	1. トレンチ出土遺物11～16	2. トレンチ出土遺物19		

I 発掘調査の経過

1 調査に至る経過

深谷市は埼玉県北部に位置し、北は利根川を挟んで群馬県と境を接している。平成18年1月1日に旧深谷市、旧岡部町、旧川本町、旧花園町の1市3町が合併して誕生した。現在、面積は137.58km²、人口は約148,000人である。農業、工業とともに盛んであり、深谷ねぎの産地としても有名である。

歴史的には後期旧石器時代から始まり、縄文時代、弥生時代、古墳時代と時代によって遺跡数の増減はあるが生活の痕跡が残されている。奈良・平安時代には榛沢・幡羅・男衾郡が置かれ、榛沢・幡羅両郡の中心地として郡家があった。平安末期から鎌倉時代にかけては鎌倉幕府の有力御家人である畠山重忠をはじめ岡部六弥太忠澄・榛沢成清などの坂東武者を輩出しており、市内の地名にその名が残っている。室町・戦国時代には関東管領上杉氏の一族で上野方面の古河公方勢力に備えた深谷上杉氏の拠点であり、江戸時代には中山道の宿場町として栄えた。また、近代日本の経済界を築いた渋沢栄一の生地としても知られており、市内には様々な時代の貴重な文化財が多く残されている。

木の本古墳群は、深谷市北部、市街地より北東へ約2kmの地域にあり、利根川支流福川右岸の柳挽台地北端部に位置している。標高は概ね36m前後である。台地上は畑地のため削平されて平坦になっており、現在墳丘が残っているものは10数基のみである。また、古墳群を含む社前遺跡や根岸遺跡などでは発掘調査によって、墳丘が削平された古墳跡が多数発見されていることから、かつては相当数の古墳が存在したと考えられる。

そのため、深谷市教育委員会では木の本古墳群を重要な遺跡であるとして市指定文化財に指定して、保存を図るとともに、古墳群周辺の広い範囲を重要な埋蔵文化財包蔵地として、事前調査などを行ってきた。

そうした中、木の本3号墳の所在する土地の所有者

から平成16年5月17日、当該地の寄付に関する打診があった。深谷市では内部協議を経て寄付の受入を決定し、受納に関する手続きを進めることとなった。その後、寄付受納に関する手続きを行っている最中の11月4日、隣接する土地所有者からも隣接地の寄付の申し出があり、それも含めて受入るものとして手続きを行い、平成16年12月13日に深谷市に寄付となった。これにより木の本3号墳とその周囲の土地は市有となったが、鬱蒼とした林であるという現況と、指定文化財を含むという特質から、その活用方法の策定に備えた情報収集が急務となった。

深谷市教育委員会では係る事態を受けて、木の本3号墳とその北東側に位置する木の本里跡を中心に現況測量図を作成する事にした。また、古墳の形態や規模・年代を知る為の確認調査も併せて実施することとし、文化財保護法第99条の規定に基づき、埋蔵文化財発掘調査通知（平成18年2月15日付深教生発第109号）を提出し、準備に入った。

2 発掘調査の経過

発掘調査の経緯は、概ね以下の通りである。

2月13日(月)

器材の搬入と、現地作業拠点となるテントの設営。

2月14日(火)～20日(月)

調査対象地内の伐採・清掃と現況測量図の作成。

特に古墳と里跡周辺は丁寧に落ち葉を除去。

2月21日(火)～3月26日(日)

先行して完成していた全測図を元に、古墳を中心見かけの墳頂部から放射状にトレンチを設定し、第1トレンチから順次掘削し精査、写真撮影と測量を随時行う。

3月17日(金)～29日(水)

補足調査と埋め戻し、機材の撤収。

(永井・幾島)

II 遺跡の環境

1. 地理的環境

深谷市の地形を概観すると、利根川と荒川に挟まれた市の中央部を東西に横断するJR高崎線付近を境として、南側には櫛挽台地が広がり、北側には妻沼低地が形成されている。また、荒川の南には江南台地が広がっている。櫛挽台地は、荒川によって形成された古い扇状地が侵食されてできた冲積台地で、寄居付近を頂部としている。妻沼低地は、利根川の自然堤防及び冲積低地であり、加須低地と並び利根川中流低地の一つに数えられている。

櫛挽台地は、以前は桑畑が広がっていたが、近年では花卉類が広く栽培されている。また、JR深谷駅周辺では個人住宅やマンション等の集合住宅が急増し景観を一変させている。構造的には、北西側の武藏野面に比定される櫛挽面（櫛挽段丘）と、南東側の立川面に比定される寄居面（御稜威ヶ原段丘）とで段丘状に形成されている。櫛挽面はほぼJR高崎線沿いの崖線で比高5～10mを持って妻沼低地と接しているが、寄居面は高崎線よりさらに北へ1.5～1.8kmほど延びており、比高2～5mをもって妻沼低地と接している。接線付近の標高は櫛挽面が40～50m、寄居面が32～36m、妻沼低地が30～31mである。櫛挽面は、標高70m付近より発する上唐沢川、押切川、戸田川、唐沢川などが北流している。最近の発掘調査で埋没谷などが発見されており、櫛挽面北端部には南北に台地を開析する浅い谷が発達していたものと考えられる。また末端には、いわゆる先端湧水と認められる池などもある。寄居面はこうした谷筋はほとんどみられず、妻沼低地と接する台地末端部を除き、水利上は生活に不向きだったと考えられる。

妻沼低地は、利根川右岸に広がる肥沃な低地である。南は熊谷市付近を境にして、秩父山塊に連なる丘陵・台地と大宮台地にはさまれた荒川低地に続き、東は加須低地に連なる。

妻沼低地の南端に櫛挽面、東に寄居面を控える一面に深谷市の中心部があり、周辺では住宅等が急増している。妻沼低地は現在ではかなり平坦であるが、利根川の氾濫や流路の変遷等により、自然堤防が発達していたものと推定されている。なお、近年の妻沼低地内の発掘調査では、過去の大地震の痕跡とされる噴砂現象が確認されている。

2. 歴史的環境

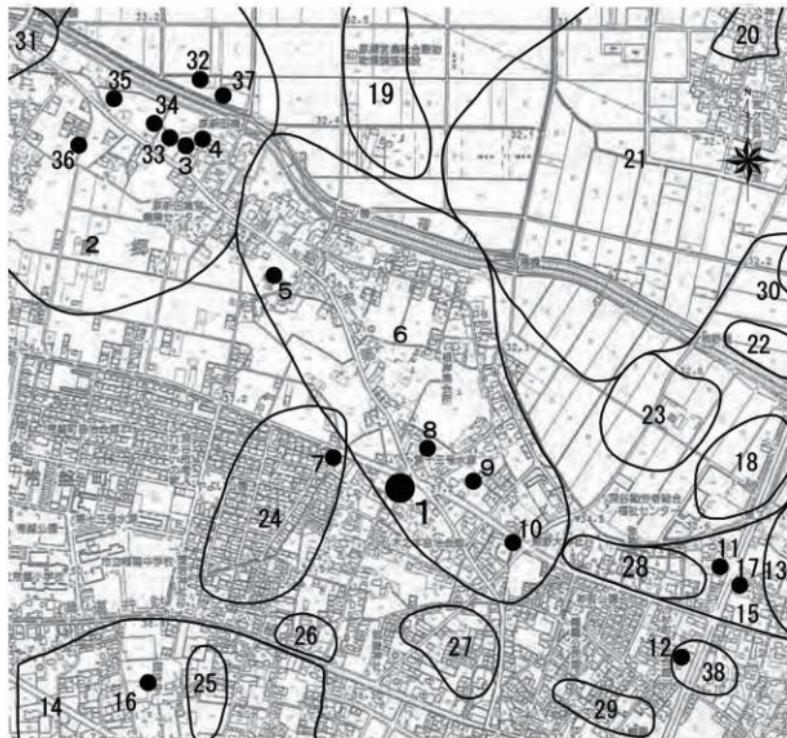
深谷市内では約740の遺跡が見つかっており、現在までに開発などによる発掘調査が行われ、様々な遺構・遺物が発見してきた。

市内で見つかっている旧石器時代の遺跡はあまりなく、荒川右岸の江南台地上の白草遺跡では細石刃や彫刻刀型石器がまとめて発見されている。他には櫛引台地上の幡羅遺跡や花小路遺跡からナイフ型石器が単独で出土している。

縄文時代になると遺跡数は増加する。市内では草創期の遺跡が多く認められ、その中でも櫛引台地上の西谷遺跡や荒川左岸の宮林遺跡、沢口遺跡などが著名である。中期になると遺跡数は爆発的に増加する。それまで集落が営まれた地域以外にも集落が作られるようになる。唐沢川沿岸の小台遺跡や江南台地上の上本田遺跡など調査例も増加している。後・晩期になると低地部の遺跡が増加し、上敷免遺跡では在地の土器と共に東海系の条痕文土器や遠賀川系の壺が検出されたりしている。

弥生時代の遺跡の市内での検出例は少ない。その中でも岡の四十坂遺跡や上敷免遺跡で発見された再葬墓は学史的にも著名である。また、本田の焼谷遺跡では弥生中期の堅穴建物跡が検出されている。

古墳時代に入り、市内で古墳が築造されるのは中期以降である。前期では周溝墓が作られており、石蔵B遺跡や上敷免遺跡、東川端遺跡などで発見されている。本郷地内に所在する安光寺古墳群では周溝墓から古墳



第1図 木の本3号墳と周辺遺跡分布図(S=1/10000)

番号	遺跡名称	時代	番号	遺跡名称	時代
1	木の本3号墳	古墳後期	20	堀之内	平安、戦国
2	社前	縄文前・中期、古墳後期～平安	21	宮ヶ谷戸	縄文中期・後期、弥生中期・後期、古墳後期～平安
3	木の本10号墳	古墳後期	22	No.1 8 9	奈良、平安
4	木の本11号墳	古墳後期	23	No.1 9 0	古墳後期～平安
5	木の本12号墳	古墳後期	24	常盤町東	縄文前期・中期、古墳後期
6	根岸	縄文中・後期、古墳後期～平安、中世、近世	25	No.1 9 8	平安
7	木の本4号墳	古墳後期	26	No.1 9 9	縄文中期、古墳後期～平安
8	木の本1号墳	古墳後期	27	No.2 0 0	古墳後期、中世
9	木の本2号墳	古墳後期	28	杉町	縄文中期、古墳後期、奈良、平安、近世
10	木の本7号墳	古墳後期	29	No.2 0 2	縄文中期、古墳後期～平安
11	木の本8号墳	古墳後期	30	No.2 4 9	奈良、平安
12	木の本5号墳	古墳後期	31	八日市	縄文後期、古墳後期～平安
13	No.0 2 6	縄文中・後期、古墳後期～平安	32	No.2 6 2	古墳後期
14	疗鼻和城跡	南北朝	33	No.2 6 3	古墳後期
15	東方城跡	縄文早期・後期、室町	34	No.2 6 4	古墳後期
16	上杉薦英墓	南北朝	35	No.2 6 5	古墳後期
17	No.1 1 6	古墳後期	36	No.2 6 6	古墳後期
18	城下	縄文中期・後期、古墳後期、平安、中世、近世	37	木の本13号墳	古墳後期
19	No.1 8 4	古墳後期～平安	38	No.2 6 9	縄文中期、近世

第1表 木の本3号墳と周辺遺跡一覧表

への変化の様子が確認されている。後期になると群集墳がたくさん作られるようになる。荒川沿岸の代表的な古墳群には左岸に小前田古墳群や黒田古墳群、右岸には近年の調査で方墳が見つかった鹿島古墳群がある。櫛引台地上では木の本古墳群や白山古墳群がある。妻沼低地においては小山川右岸では上増田古墳群、上敷免古墳群、森下古墳群、戸森古墳群、小山川左岸では下手計西浦古墳群などが見つかっている。また、櫛引台地北西部には、四十塚古墳や寅稻荷塚古墳、お手長山古墳、内出八幡塚古墳など有力者の古墳がまとまっており、四十塚古墳からは横矧板鉢留短甲や五鈴付鏡板などの遺物が出土している。他には、櫛引台地上の上野台地内には、前述の古墳群などに埴輪を供給したと考えられる割山塙輪窯がある。古墳時代の集落は台地上よりも妻沼低地で多く見つかっており、生活の基盤の変遷がうかがえる。

奈良・平安時代には市内は榛沢郡・幡羅郡・男衾郡に含まれた。郡の中心には古代の役所である郡家が營まれた。深谷市内においては榛沢郡と幡羅郡の郡家跡が発見されている。岡地内には榛沢郡家正倉跡の中宿遺跡があり、南に隣接する熊野遺跡は発掘調査の成果から榛沢郡家の存在が推定されている。

幡羅郡家跡である幡羅遺跡は東方地内にあり、正倉群や館、厨跡などが発見されている。隣接する熊野市の西別府庵寺や西別府祭祀遺跡、湯殿神社などと併せて郡家・古代寺院・祭祀遺跡などが一体で確認された全国でも貴重な遺跡であり、現在も史跡指定に向けた確認調査が続いている。

他には、豪族居宅である本田地内の百済木道跡や榛沢郡の古代寺院である岡地内の岡庵寺などがある。

中世の深谷は、畠山重忠や岡部六弥太に代表される坂東武者を輩出し、室町・戦国時代には深谷上杉氏が上野方面の交通の要衝として城を築いた。畠山地内の畠山館跡では調査によって堀跡や石組造構が発見されている。畠山重忠墓も調査され、板碑や骨蔵器が出土している。普濟寺地内には岡部六弥太墓があり、調査によって骨蔵器が多数出土している。

深谷上杉氏は国濟寺地内にある庁鼻和城から古河公

方勢力に対する備えとして15世紀中頃に現在の深谷市街地にある深谷城に移った。庁鼻和城跡の調査では土壘などが検出されている。深谷城跡は近年の調査で、城の北側からは障子堀、大手では自然地形を利用した深い堀が確認されるなどその様相が明らかになりつつある。国濟寺や人見の昌福寺、田谷の高台院には深谷上杉氏関係の墓塔が残っている。

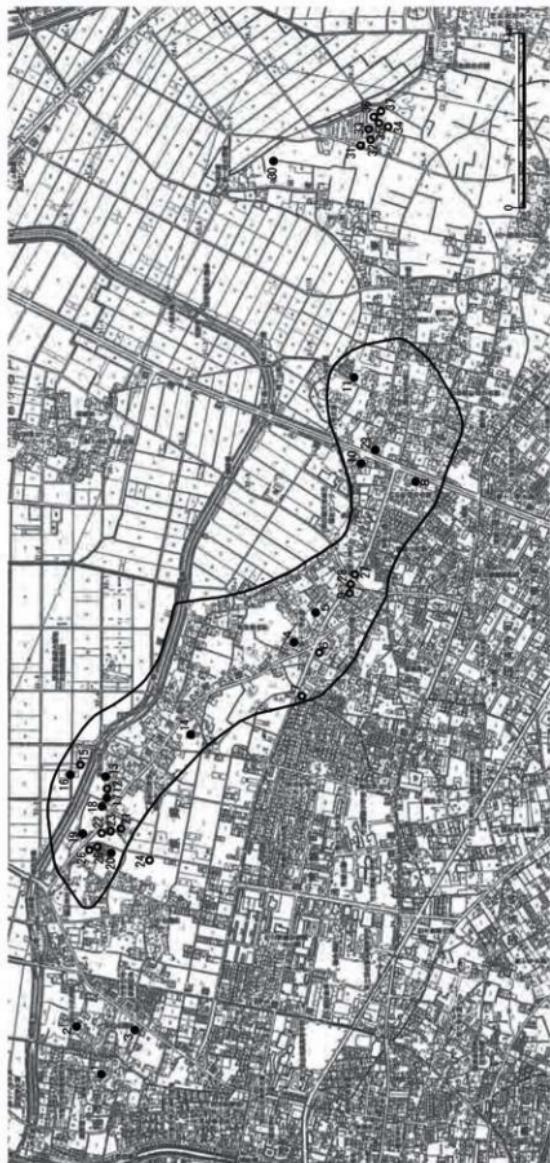
他にも本田城跡や人見館跡、北根地内の東原遺跡など中世の館跡や寺院周辺の墓城が発見された本田地内の諸光寺庵寺や二重の堀による方形区画を有し、区画中央の方形建物を中心に埴墓が配置される中世寺院の全貌が明らかになった百済木道跡（万願寺跡）、中世墓が発見された舟山遺跡がある。

近世の深谷は、中山道の深谷宿があり現在の深谷市街地は当時の宿場町として栄えた場所である。市内は諸代大名の安部氏が岡部地域を治めていたのを除いて、旗本などの所領があり組んでいた。普濟寺地内には岡部藩陣屋跡である安部根津守陣屋跡があり、幕末には砲術家の高島秋帆も一時幽閉されていた。また、北根地内には旧北根代官所跡もある。

近代の深谷は、日本近代経済の父といわれた渋沢栄一の出身地である。生地である血洗島地内の「中の家」や設立に関与した上敷免地内の日本煉瓦製造株式会社の旧煉瓦製造施設であるホフマン輪窯や木造洋館、電気施設が現在も残っている。また、栄一の喜寿を記念して世田谷区内に建築された誠之堂などの洋館も大寄地内に移築されている。こうした渋沢栄一に関連する文化財や旧跡は、近代化遺産として保存され市民にも公開活用されている。

今回、調査された木の本3号墳を含む木の本古墳群では、平成2年に木の本4号墳の墳丘脇部の調査、平成5年に埼玉県立さきたま資料館が中心となって実施した「埼玉県古墳詳細分布調査」の一環として行われた木の本10号墳の調査、平成10年に北通り線開通で木の本7号墳の周堀の調査が行われている。また、平成6年には、福川左岸の妻沼低地でも古墳の周溝が発見され、木の本古墳群が福川北側の低地部に広がる可能性も出てきている。

（幾島）



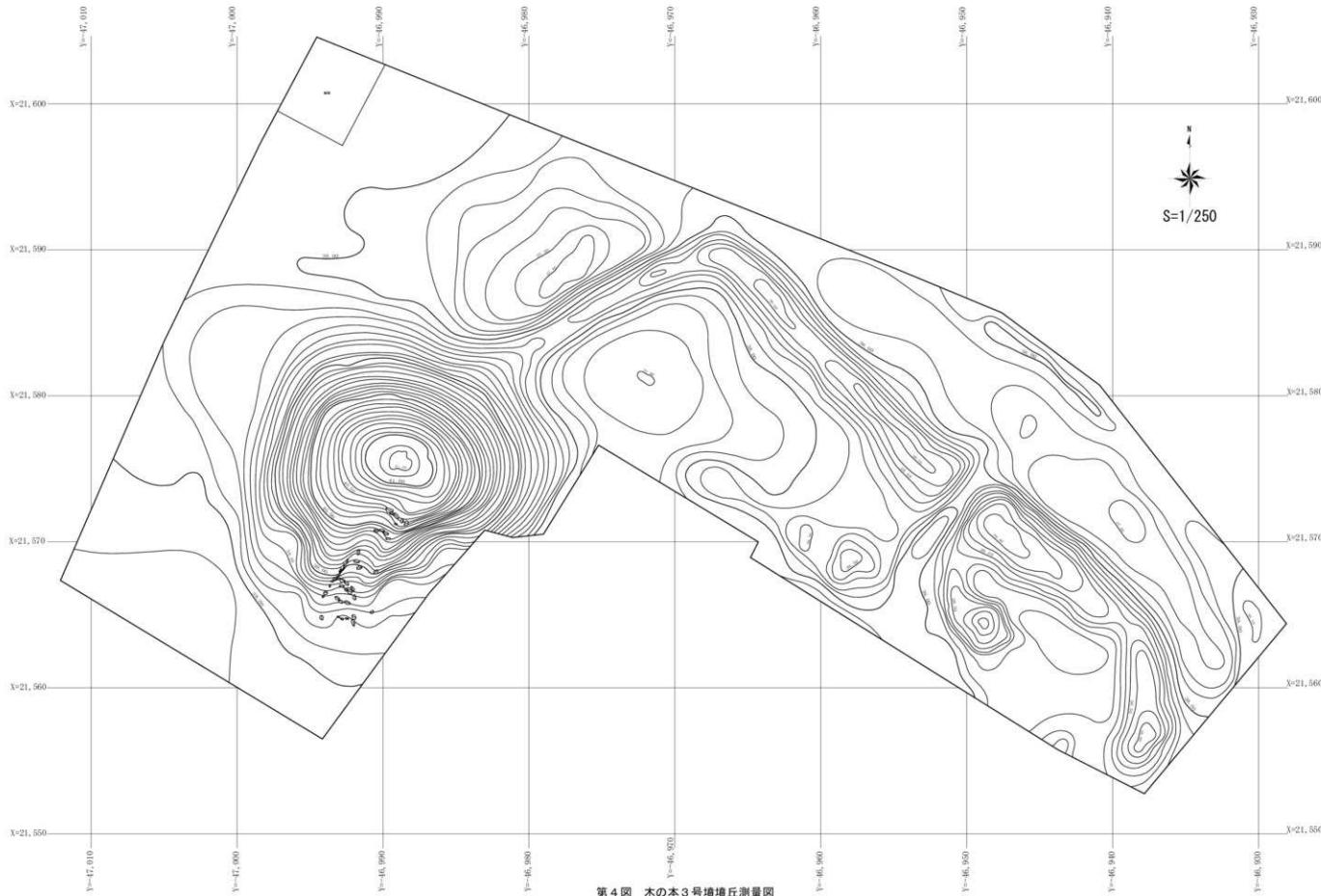
第2図 木の本古墳群と周辺の古墳 (●: 古墳を指)

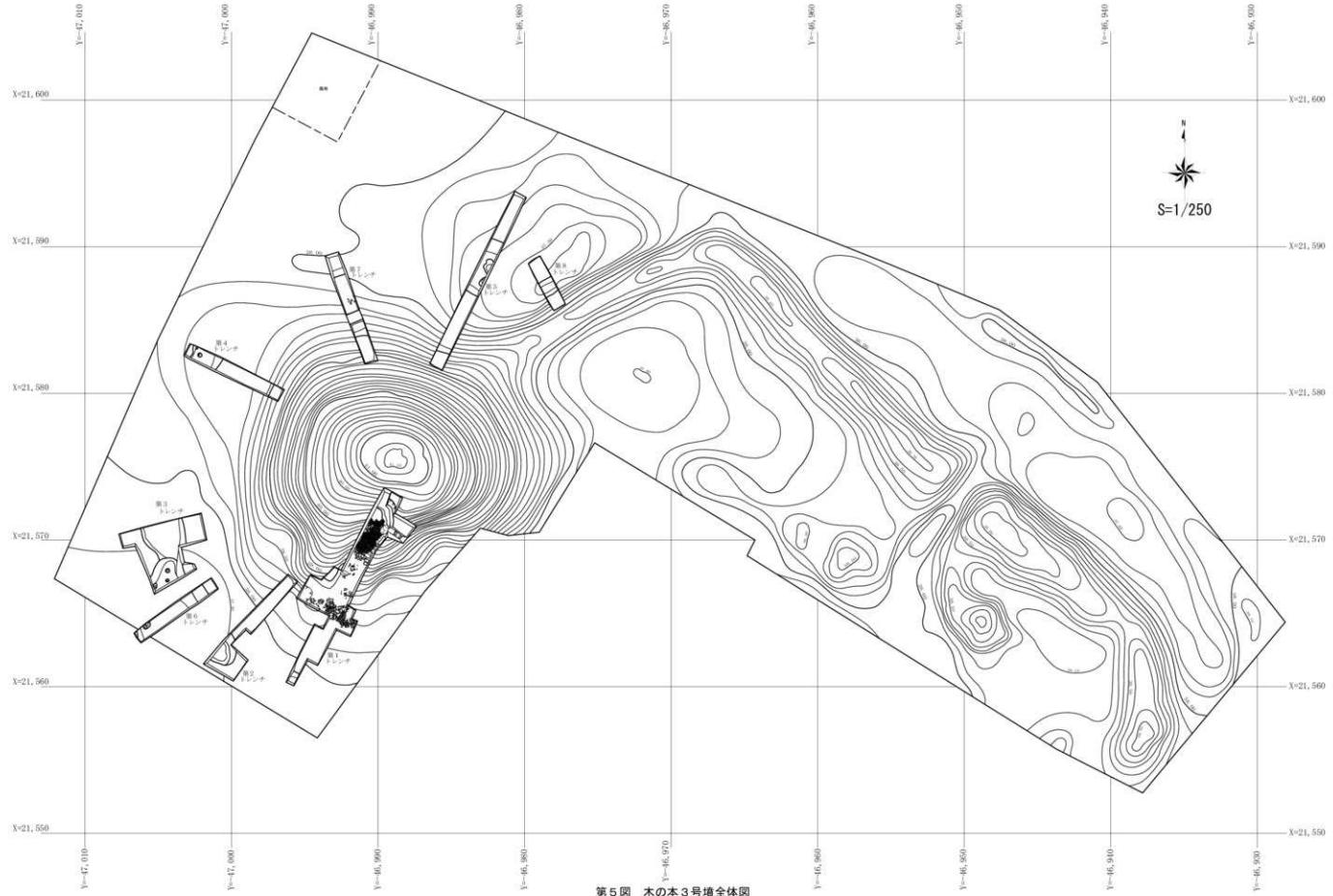
No.	古墳名								
1	稻荷町北古墳	2	火の貝原	3	木の本1号墳	4	木の本2号墳	5	木の本3号墳
7	木の本4号墳	8	木の本5号墳	9	木の本6号墳	10	木の本7号墳	11	木の本8号墳
13	木の本11号墳	14	木の本12号墳	15	木の本13号墳	16	木の本14号墳	17	木の本15号墳
19	木の本26号墳	20	木の本26号墳	21	社前1号古墳跡	22	社前2号古墳跡	23	社前3号古墳跡
25	社前5号古墳跡	26	社前6号古墳跡	27	船岡1号古墳跡	28	船岡2号古墳跡	29	船岡1号古墳跡
31	森吉古墳	32	下野1号古墳跡	33	下野2号古墳跡	34	幡屋1号古墳跡	35	幡屋2号古墳跡
37	幡屋4号古墳跡								幡屋3号古墳跡

第2表 木の本古墳群と周辺の古墳



第3図 木の本3号墳位置図 ($S = 1/2,500$)





第5図 木の本3号墳全体図

III 発掘調査の成果

1 古墳の現況と調査方法

木の本3号墳は、深谷市大字原郷字木ノ本に所在する古墳で、妻沼低地を北に臨む櫛掩台地寄居面の北縁に位置する。東西に広く分布する木の本古墳群のほぼ中央、台地崖線からはやや奥まった平坦面上に立地する。周辺には木の本1・2・4・7号墳をはじめとした古墳が複数存在し、木の本古墳群中的一支群と言い得る状況を呈している。また、本古墳周辺は縄文と中近世を中心とした複合遺跡の根岸遺跡内に相当し、今回の調査でも縄文時代中期の土器片が出土している。

古墳の現状は山林で、全体として墳丘の遺存状態は概ね良好に見える。しかし東側は、東に接する民家の関係から削られており、特に南東側は崖状を呈し防空壕の伝承もあった。また墳頂には、最近まで氏神を祀る祠が存在し、墳丘の南側斜面にはこの参道である石段が設けられ改変を受けている。さらに北側墳裾には、木の本里跡と言われる土星状遺構が接続しており、細かく見るとあまり良い保存状態とは言い難い。

現状での墳丘は先に述べたような改変部分があるものの概ね円墳として認識できる状態であったが、発掘に先立ち行った墳丘測量図（第3図）を見ると、東西22m、南北20mの楕円形ないしは隅丸方形を呈している。

調査は墳形確認と埋葬施設の保存状態の確認を意図して実施したもので、現況で最も高い見かけの墳頂部を中心に、トランシットを用いて対象地外となる東側を除いて放射状に7本、土星状遺構の古墳寄りに任意で1本の計8箇所のトレンチを設定した。古墳部分のトレンチは立木を避けて設定した為、必ずしも方位に対して規則正しい配置とすることは叶わなかったが、必要に応じて適宜拡張を行い、可能な範囲での情報収集に努めた。結果として円墳と判断される所見を得ることができたが、方墳や多角形墳の可能性も捨てきれず、墳形については、今後の課題となろう。

次節では各トレンチの調査所見を述べる。トレンチの番号は設定順である。

2 各トレンチの調査所見

第1トレンチ（第6図・図版1-2）

埋葬施設の検出を意図したトレンチである。かつての氏神様への参道部分を利用し、墳頂から南南西方向に設定し、幾度かの拡張を経て最終的には長さ14.5mを掘削した。また、調査の進行する過程で石室を確認、これに伴う前庭部前面から石積施設が検出されたので、この部分でトレンチを両側へ変則的に拡張した。

本トレンチにおける遺構は、南端部で周堀と推定される落ち込み、トレンチの中央部で石室前庭部とそれに伴うであろう石積施設、トレンチ北側では横穴式石室が検出された。また、石室部では土層断面図にも明確に現れているように大規模な盗掘坑が存在しているが、石室の床面は差ほど荒れた状態ではなく、盗掘というよりは石材採取を目的とした乱掘坑と判断される。

石室は横穴式石室で、東側壁の基底石とその抜き取り穴、その内側からは礫を敷いた床面が確認された。側壁平面プランが曲線を描く胸張り石室で、側壁は荒川水系の河原石を原則として小口積し、側壁の中央部分に相当する部分には大形の河原石を立てて設置していた。奥壁寄りの側壁石材は完全に抜き取られていたが、精査の結果石材の据え痕が把握され、側壁が旧地表面を若干掘り窪めて設置されている点と、石室部分を陽刻状に削り残した状態を構築面としており、明確な堤形を伴わない点を明らかにし得た。床面は玄室部分では拳大的の角閃石安山岩を主体に荒川水系の小砾を交えた礫床で、奥壁寄りは擾乱されて薄くなっているが、それ以外の特に袖部寄りでは厚く敷かれていた。羨道部分の床面は細かい砂礫を敷いた状態であったようだが、擾乱によって側壁も大半を失っている状態なので、

明確な構造は不明である。

石室裏込めは砂礫を用いており、石室側壁である河原石の背後を、砂礫によって充填被覆する工程を反復する様子が断面観察によって明らかとなった。全体に砂礫の使用量は少なく、特に石室下半では薄い傾向がある。裏込めの砂礫はローム土を主体とする埴丘盛土によって覆われており、各工程単位で行われた結果、土層断面では鋸歯状に見える。盛土はかなり細かく、かつ入念な転圧により硬く締まっているが、これは石室裏込めの一環として盛土された結果と考えられた。

石室前庭部は弱く「ハ」字状に開放する平面形態で、掘削状を呈し、その壁面は石積を伴わずに埴丘盛土が露出する状態であったと推定される。前庭部の底面は石室を背にして緩いスロープ状に下っており、石室の入口部から南に約3m地点にある石積施設で一段下がる。この石積施設が前庭部前端を区切る施設なのか、あるいは石室を閉塞していた石材が遺棄されたものなのかは、上面で調査を止めている為に明らかでない。なお、この石積の南端は概ね他のトレンチでの埴丘部の裾に対応すると思われ、石積施設の南には約4mの平坦面が存在し、他のトレンチでも同様の状況であることから、埴丘部と周堀の間に巡る幅広のテラスであると判断される。

周堀はトレンチ南端で確認されたが、内側立ち上がり部分のみの確認で、幅については立木と調査期間の制約から明らかにできなかった。先述のテラス上面からの深さは30cmで、比較的黒味の弱い覆土である。

遺物は、石室玄室では床面では刀装具1点・鐵鏃片8点・耳環2点・銅釧1点と、歯牙25点と骨片が床面標の隙間から出土している。特に耳環・銅釧・歯牙は原位置と考えられるが、他は石室の破壊時に失われた残骸であろう。前庭部の中央からは、散在する河原石と共に完形の土師器龜が1点出土しており、須恵器を忠実に模倣した特異なものであると共に、本古墳における墓前祭祀の時期を示す資料として重要である。

他にトレンチ各所から須恵器大甕片や埴輪片、縄文土器片、焰烙・擂鉢・かわらけ等の中近世土器や縁泥

片岩片が出土している。特に須恵器大甕片はある程度まとまった点数出土しているので、本古墳の埴頂部に置かれていた可能性が高いが、埴輪片は出土点数が少ないので混入であろう。中近世土器は、埴頂部にかつてあった祠や東に接する民家との関係と考えられる。個々の遺物詳細は、観察表を参照されたい。

第2トレンチ（第8図・図版3-2）

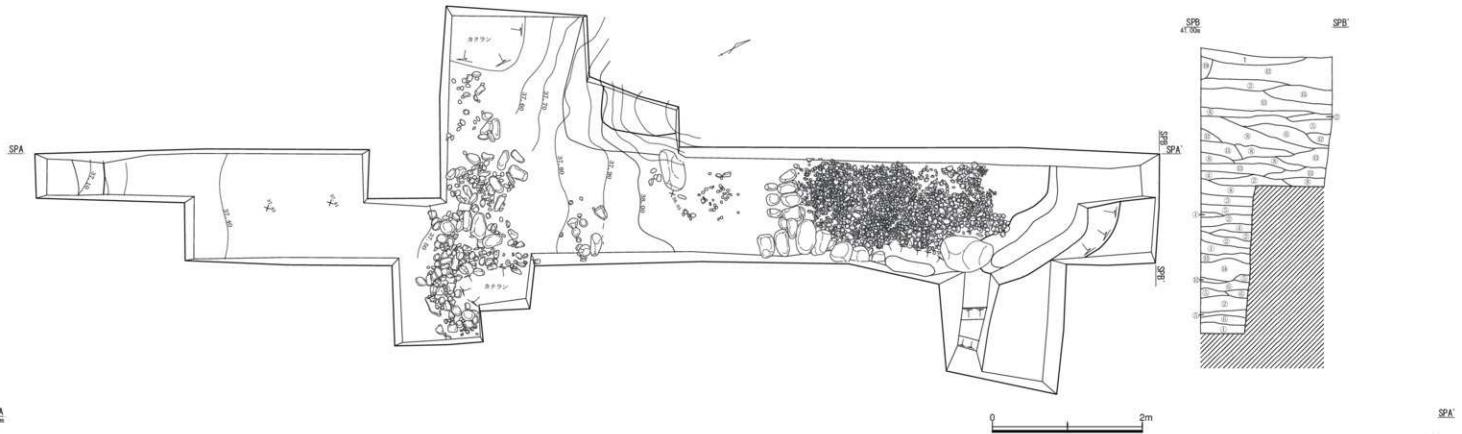
第2トレンチは第1トレンチの西側に設定した調査区で、埴丘部と周堀の検出を意図して幅1m長さ8m掘開した。埴丘部の裾は擾乱により不明、從ってテラスの幅も不明である。周堀は幅2.3mで確認され、断面は錐底状を呈し黒色土が堆積していた。また周堀はトレンチ東側で収束する可能性があったので、これを明らかにすべく東に拡張、石室の斜前方に土橋状掘り残し部が存在する事が判明した。

遺物は主に埴輪・須恵器・土師器片と土錐・焰烙・灰釉陶器・ガラス製品・貝が出土した。特に縄文土器はテラス上面に刺さった状態で出土していることから、縄文遺構の存在も予想されたが、精査は行っていない。

第3トレンチ（第9図・図版3-3）

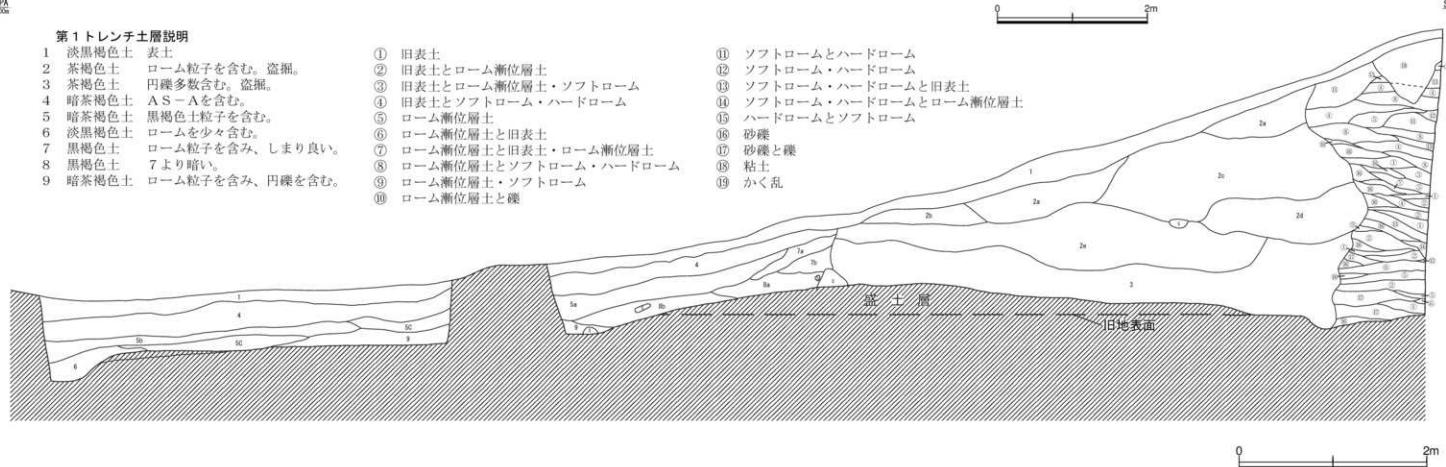
第2トレンチ西方に設定した調査区で、周堀の検出を意図して幅1m長さ6mを掘開した。ローム面まで掘削したところ予定通り周堀を確認したが、浅く不定形であった為、立木を避けつつ南東に周堀を追いかけて拡張した。結果として弱い張り出し部への括れ部を思わせる平面形態の周堀が掘りあがった。しかしトレンチの土層断面では、旧表土に近い暗茶褐色土の遺存状態が良好な為、ローム面以下の周堀プランを認識しているに過ぎない危惧はあるので、積極的には張り出し部の存在は肯定することは出来ない。なお、周堀の底面からは小穴3箇所を確認しているが、覆土の質感からは後世のものと判断された。

遺物は須恵器・土師器・埴輪の小破片、縄文土器片等が少量出土している。大半は上層からの出土である。

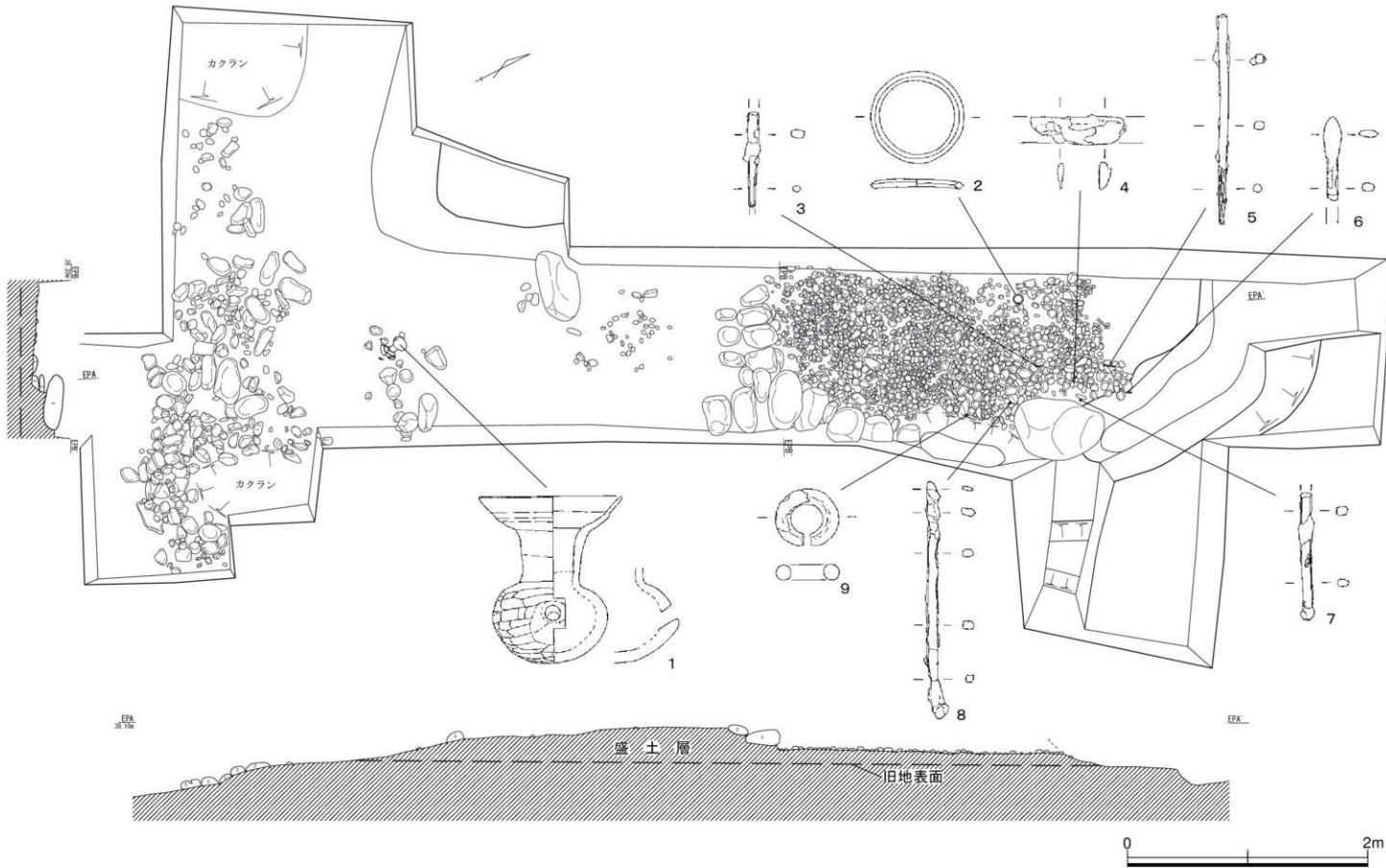


第1トレンチ土層説明

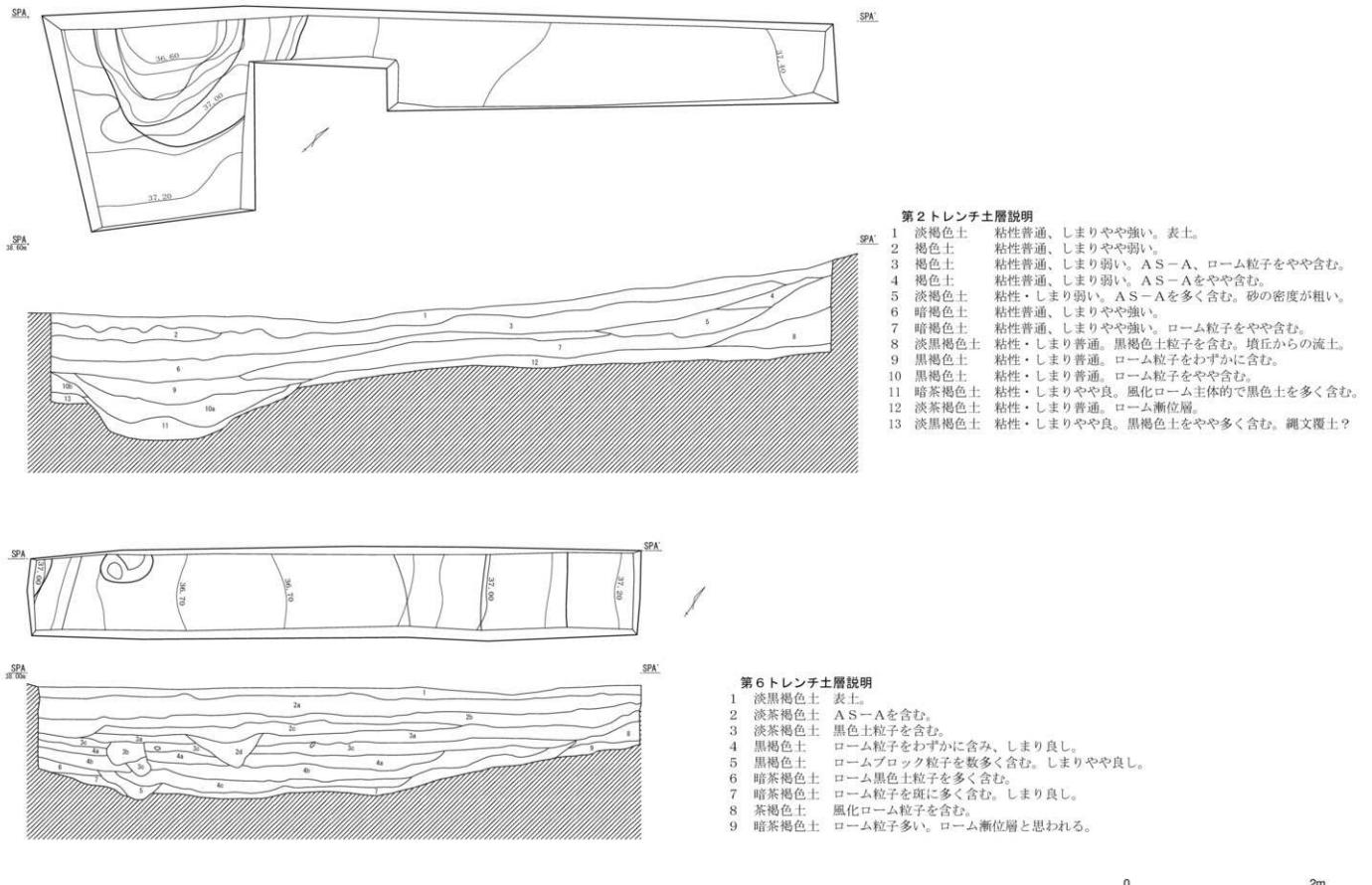
- 1 淡黒褐色土 表土
 - 2 茶褐色土 ローム粒子を含む。盜掘。
 - 3 茶褐色土 円礫多数含む。盜掘。
 - 4 暗茶褐色土 AS-Aを含む。
 - 5 暗茶褐色土 黒褐色土粒子を含む。
 - 6 淡黒褐色土 ロームを少々含む。
 - 7 黒褐色土 ローム粒子を含み、しまり良い。
 - 8 黒褐色土 7より暗い。
 - 9 暗茶褐色土 ローム粒子を含み、円礫を含む。
- ① 旧表土
 - ② 旧表土とローム漸位層土
 - ③ 旧表土とローム漸位層土・ソフトローム
 - ④ 旧表土とソフトローム・ハードローム
 - ⑤ ローム漸位層土
 - ⑥ ローム漸位層土と旧表土
 - ⑦ ローム漸位層土と旧表土・ローム漸位層土
 - ⑧ ローム漸位層土とソフトローム・ハードローム
 - ⑨ ローム漸位層土・ソフトローム
 - ⑩ ローム漸位層土と礫
 - ⑪ ソフトロームとハードローム
 - ⑫ ソフトローム・ハードローム
 - ⑬ ソフトローム・ハードロームと旧表土
 - ⑭ ソフトローム・ハードロームとローム漸位層土
 - ⑮ ハードロームとソフトローム
 - ⑯ 砂礫
 - ⑰ 砂礫と礫
 - ⑱ 粘土
 - ⑲ かく乱



第6図 第1トレンチ平面図・土層図



第7図 石室周辺遺物出土状況図・断面図



第8図 第2・第6トレンチ平面図・土層図

第4トレンチ（第10図・図版3-5）

第4トレンチは古墳の概ね西側に設定した調査区で、埴丘部と周堀の検出を意図し、幅1mで長さ7mを掘開した。埴丘部の裾はトレンチ東端で検出され、後世の根切溝で破壊されている部分もあるが、旧地表面上への盛土と、旧表土を削り出してテラスとの間に変換点を設ける状況が把握された。テラスは旧表土を削除してロームを露出させたもので、その上面は比較的黒味の強い覆土によって覆われている。周堀はトレンチの西端で検出され、辛うじて調査区内で両側の立ち上がりを把握することができた。幅は上端で2.3mを測り、他の調査区に比べて幅が狭く直線的な傾向は注意される。なお周堀内には中層に黒色土が堆積していた。

遺物は少量の埴輪片と角閃石安山岩片、縄文土器の破片が出土している。

第5トレンチ（第11図・図版4-3）

第5トレンチは古墳北側に周堀と埴丘部の検出を意図して設定し、幅1m・長さ13m掘開した。

埴丘部の裾はトレンチ南端で検出され、土層断面からは後世の改変もほとんど無く、保存状態は良好と判断される。旧地表面上への盛土と、旧表土を削り出すことでテラスとの間に変換点を設ける。テラスの上面は埴丘部との変換点から緩く北に向かって下っており、従って周堀内側の立ち上がりの高低差は、周堀外側と比べて低い。テラス上の堆積土は黒褐色で、周堀に近くなるにつれ黒味が増す。周堀はトレンチ中央で検出され、上端での幅は4m、深さは周堀外側の確認面からだと80cm、テラス側は15cmの高低差がある。堆積土は特に中層で黒色土が顕著、底面は凹凸があり土壤状を呈する部分もあるが、基本的には地山塊主体土によって整地されて平坦化されており、堅穴住居の床面と堀方の関係に類似した様相を示している。

遺物は少なく、中層以上から埴輪片・土師器片・かわらけ・鏡・縄文土器片が出土した。

第6トレンチ（第8図・図版3-3）

第6トレンチは先の第2・3トレンチ間の調査区で、幅1m長さ6mを掘開した。第3トレンチで推定された張り出し部の有無を追求する意図から設定したもので、結果として第3トレンチで周堀と考えられる落ち込みが検出された。周堀は断面皿状で幅5.5mと広く、内側の立ち上がりは不鮮明、外側はさらに南側への広がりを窺わせるプランで、内側よりは明確な立ち上がりを呈している。覆土は中層において黒色土が顕著で、下層は漸位的に色調が明るくなり、底面との境界はやや不鮮明であった。また底面の外側寄りからは小穴が1箇所検出されたが、覆土の状態からは木根に由来する自然遺構と推定された。

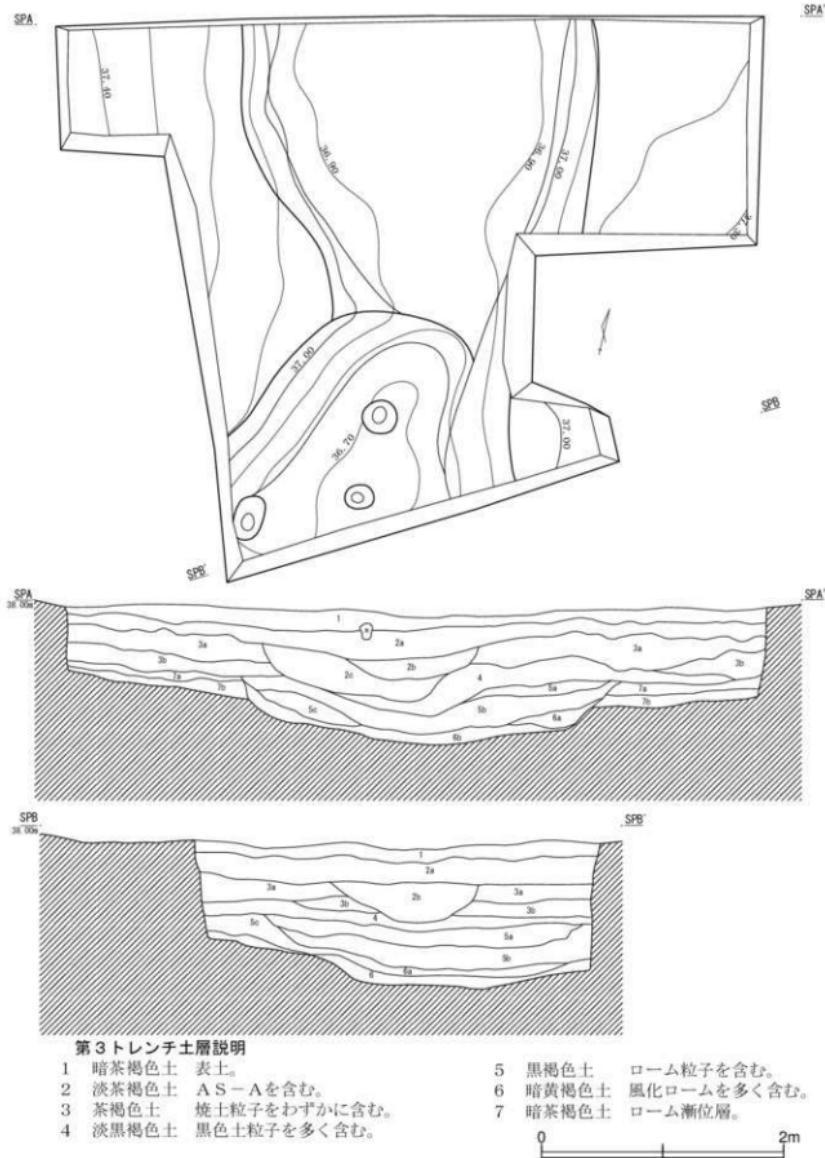
結論から言えば、本調査区では張り出し部の有無を決定付ける材料は得られなかったが、古墳南西側で周堀が不規則に広くなっている事は確実である。

遺物は少なく、縄文土器と埴輪・土師器の小破片が出土している。

第7トレンチ（第10図・図版3-6）

第7トレンチは第4・5トレンチ間の調査区で、途中に立木を避けて未調査区とした部分を挟み2分されるが、幅1mで長さ8m掘開した。埴丘部と周堀の検出を意図して設定した。埴丘部の裾は調査区の埴丘寄りで検出され、立木を避けた為に判然としない部分もあったが、他のトレンチ同様、旧地表面上への盛土と、旧表土を削り出すことでテラスとの間に変換点を設けている様子が把握された。テラスは埴丘部との変換点から緩く外側へ向かって下っており、黒褐色土で覆われていた。周堀は内側立ち上がりのみを検出したので、幅については不明である。内側の立ち上がりはテラス上面からは40cmであり、第5トレンチ同様、周堀外側の立ち上がりに比べれば低いものと考えられる。覆土は中層が最も黒味が強い黒色土で、概ね第5トレンチと同じであった。

遺物はテラス上の黒褐色土上層や周堀中層からやや大形の埴輪片（形象含む）が数点出土しており、この



第3トレンチ土層説明

- | | |
|----------------------|---------------------|
| 1 暗茶褐色土 表土。 | 5 黒褐色土 ローム粒子を含む。 |
| 2 淡茶褐色土 A S - A を含む。 | 6 暗黄褐色土 風化ロームを多く含む。 |
| 3 茶褐色土 焼土粒子をわずかに含む。 | 7 暗茶褐色土 ローム漸層。 |
| 4 淡黒褐色土 黒色土粒子を多く含む。 | 0
2m |

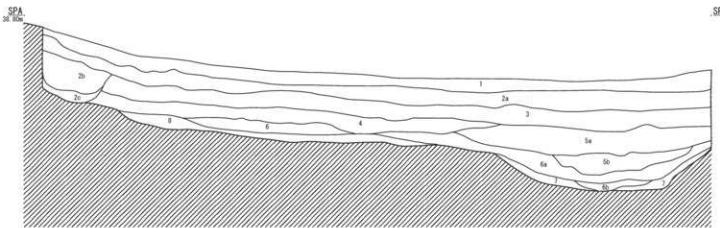
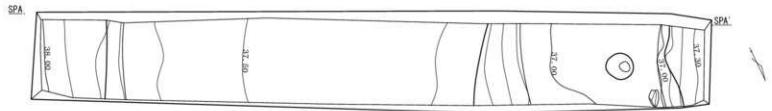
5 黒褐色土 ローム粒子を含む

6 暗黄褐色土 風化ロームを多く含む。

7 暗茶褐色土 口一ム漸位層。

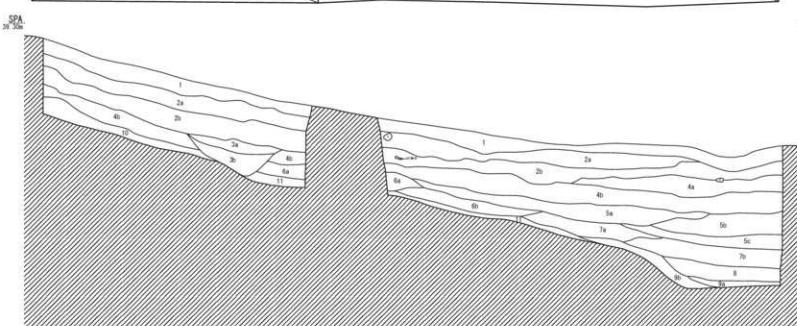
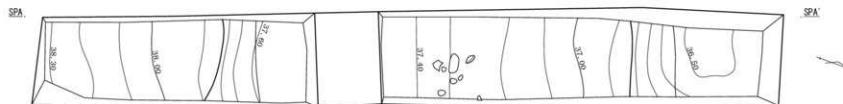
9

第9図 第3トレンチ平面図・土層図



第4 トレンチ土層説明

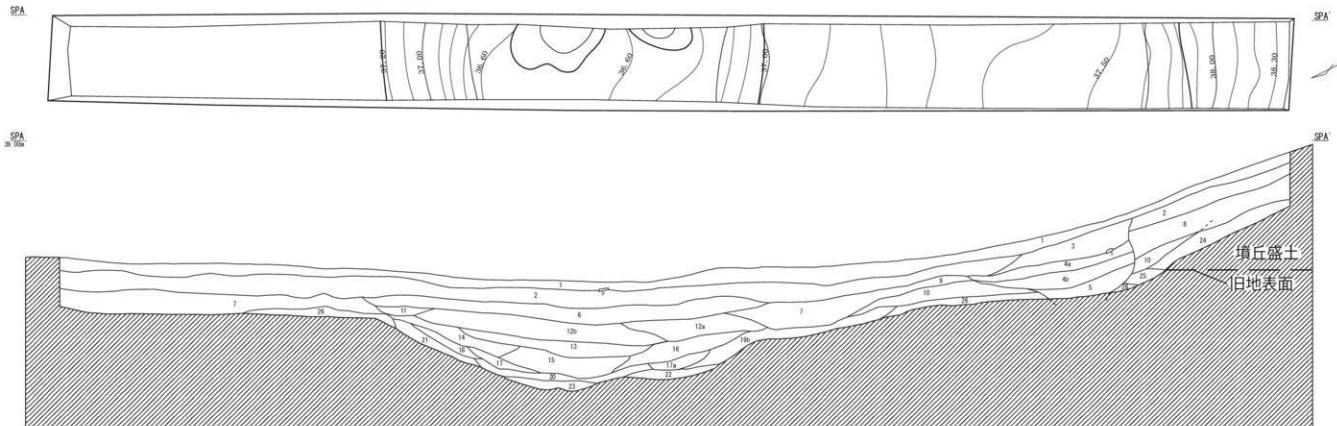
- 1 淡黒褐色土 表土。
 2 淡茶褐色土 AS-Aを含む。
 3 淡茶褐色土 ローム粒子を含む。
 4 茶褐色土 ローム粒子をわずかに含む。
 5 黒褐色土 黒色土主体。しまり良。
 6 暗茶褐色土 黒色土を多く含む。
 7 暗黃褐色土 ローム粒子主体で黒褐色土をやや含む。
 8 暗茶褐色土 黑色土粒子を含む。旧表土か旧表流出土。



第7トレンチ土層説明

- 1 淡黒褐色土 表土。
 - 2 淡茶褐色土 $AS-A$ を多く含む。
 - 3 深茶褐色土 $AS-A$ をやや含む。根切構?
 - 4 茶褐色土 黒褐色土をやや含む。
 - 5 暗茶褐色土 黒褐色土粒子を多く含む。
 - 6 暗褐色土 ローム土を含む。
 - 7 黑褐色土 しまりやや強い。
 - 8 暗黄褐色土 ローム粒子多く、しまり強い。
 - 9 黄褐色土 風化リム土主体。
 - 10 明茶褐色土 ロームブロックを斑に含む。埴丘盛土の風化土?
 - 11 暗茶褐色土 ローム漸層土。テラス面の風化十層と表される。

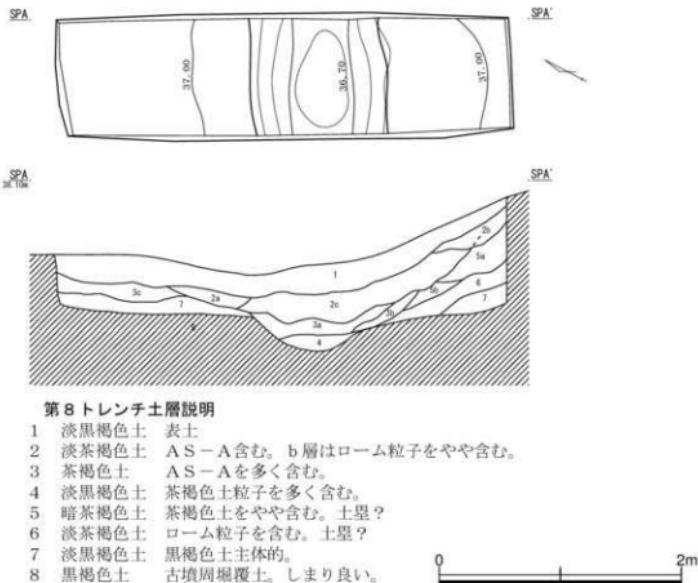
第10図 第4・第7トレンチ平面図・土層図



第5トレーンチ土層説明

1 暗褐色土	粘性・しまり弱い。表土。	14 暗褐色土	粘性・しまり普通。ややローム粒子を含む。周堀堆積層。
2 暗褐色土	粘性普通、しまり弱い。天明AS-Bをやや含む。	15 暗褐色土	粘性普通、しまりやや弱い。層下部にオーム粒子・ブロックを含む。周堀堆積層。
3 暗褐色土	粘性普通、しまり弱い。天明AS-Bをやや含む。近世の瓦を包含。	16 暗褐色土	粘性・しまり普通。ややローム粒子を含む。周堀堆積層。
4 暗褐色土	粘性普通、しまりやや弱い。3層に比べやや弱い。AS-Aを多く含む。	17 淡黄褐色土	粘性・しまり普通。ローム粒子を含む。周堀堆積層。
5 暗褐色土	粘性・しまり弱い。ボソボソしている。	18 淡黄褐色土	粘性・しまり普通。ローム粒子を斑に含む。周堀堆積層。
6 暗褐色土	粘性普通、しまりやや弱い。2層に比べてやや弱い。	19 淡黄褐色土	粘性普通、しまりやや強い。ローム粒子をやや含む。周堀堆積層。
7 暗褐色土	粘性普通、しまりやや強い。	20 淡黄褐色土	粘性普通、しまりやや弱い。ローム粒子を多く含む。18層より明るい。周堀堆積層。
8 暗褐色土	粘性普通、しまり弱い。填丘部からの崩落土。	21 暗黄褐色土	粘性普通、しまりやや弱い。ローム粒子・ブロックを多く含む。周堀堆積層。
9 暗褐色土	粘性やや強い。しまり普通。周堀堆積層。	22 暗黄褐色土	粘性普通、しまりやや強い。ローム主体でやや淡褐色土を含む。整地層？
10 暗褐色土	粘性普通、しまりやや弱い。ローム粒子をやや含む。周堀堆積層。	23 黄褐色土	粘性普通、しまり強い。ローム主体でやや淡褐色土を含む。整地層？
11 暗褐色土	粘性・しまり普通。周堀堆積層。	24 暗褐色土	粘性普通、しまりやや強い。ロームブロックをやや含む。8層より暗い。填丘の盛土。
12 暗褐色土	粘性・しまり普通。aはbよりやや明るい。周堀堆積層。	25 暗褐色土	粘性普通、しまりやや弱い。
13 暗褐色土	粘性・しまり普通。12層に比べて明るい。周堀堆積層。	26 暗褐色土	粘性・しまり普通。ローム漸位層。

第11図 第5トレーンチ平面図・土層図



第12図 第8トレンチ平面図・土層図

調査区を見ると埴輪を伴う古墳とも思えるが、実際には本古墳北西に埴輪を持つ古墳が存在していた可能性があり、その古墳からの流れ込みであろう。他に縁泥片岩の破片も出土しており、主体部の構築材である可能性が高い。繩文土器片も出土している。

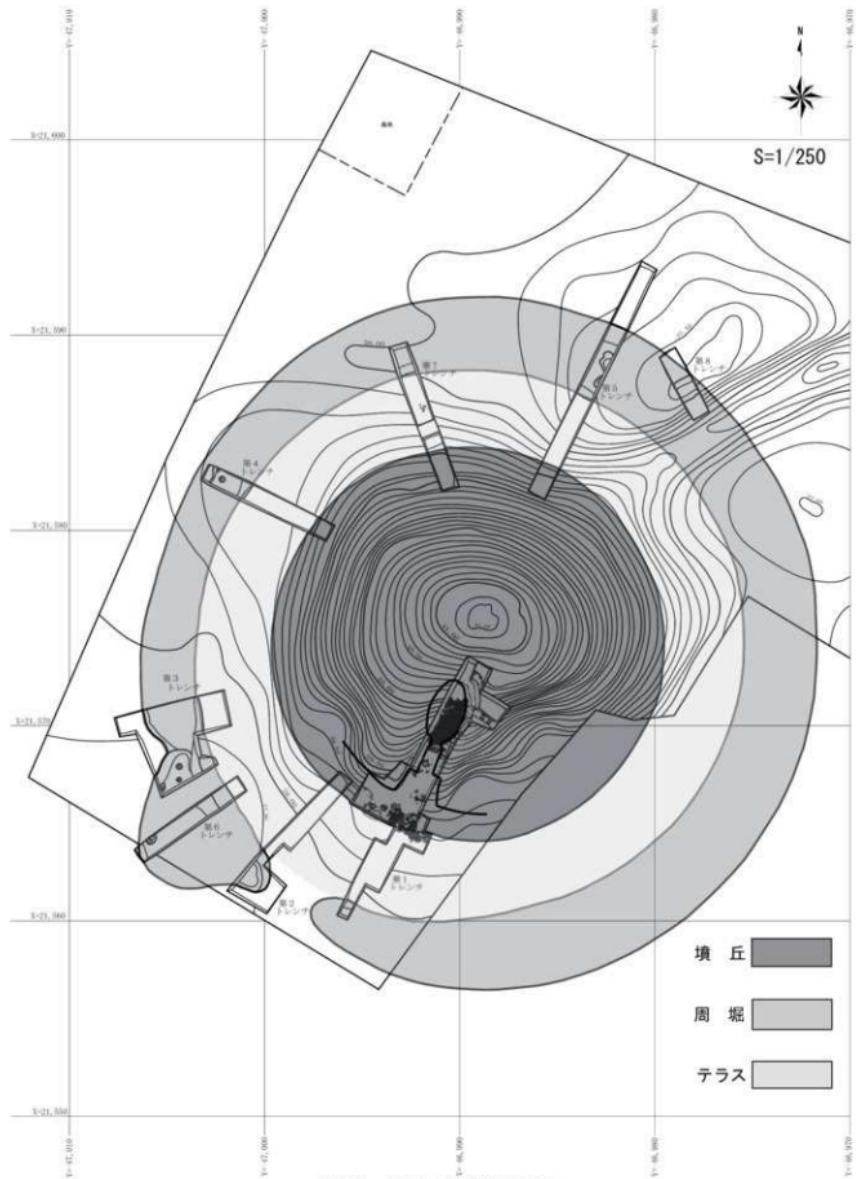
第8トレンチ（第12図・図版4-6）

第8トレンチは本古墳の周囲と土壌状遺構の重なる部分に設定したもので、土壌の性格解明を意図して幅1m長さ3.5mで掘開した。その結果、土壌に沿って掘られた幅約1.0～1.2m、現地表面からの深さは約70cmの溝が確認された。底面は平坦で、壁は緩や

かに立ち上がる。この溝は古墳周囲の覆土を掘り込んでおり、覆土中にA S - A が含まれることから、天明3年の浅間山噴火に近い時期の掘削剤と考えられる。土壌については断ち割り調査を行っているが、かなりルーズな層序で締まりも弱い。以上の点からは、土壌状遺構が江戸時代の天明年間には遅くとも形成され、その性格も近世屋敷に伴うものと考えられる。従って本古墳への改変や石室の破壊も、概ねその時期と考えられよう。

遺物は繩文土器・埴輪・須恵器の破片が少量出土しているが、土壌状遺構に伴う遺物は無い。

（永井・幾島）



第13図 木の本3号墳推定復元図

3 古墳の形状・規模（第13図）

本墳は大きく墳丘部・テラス・周堀の三要素から成り立っている。ここでは各トレントの括りを取り扱い、その構造について復元的に総括しておきたい。

結論から言えば本墳は墳丘部の幅で直径20m、周堀内側で直径28mを計る円墳である公算が高く、周堀の外側の最大径は36mである。墳丘の高さは調査トレントで検出されたテラス部分から現存している墳頂まで約3.8mである。しかし調査面積が古墳に比して僅少である為、現況墳丘の等高線を尊重して墳丘部が一辺18m程度の方墳と見ることも不可能ではないが、今回は円墳で報告する。以下、各構成要素に沿って再び本墳を説明しておきたい。

墳丘部は、旧地表土とローム漸位層上部を削り出した裾部と、旧地表面以上は盛土という構造で、やや特異なものである。テラスとの間には見かけの墳丘裾となる屈曲部があり、ここを基準とすると径20mの円墳と推定される。

最大の関心事である盛土工法については、古墳保護の観点から盛土を断ち割っていない為に不明であるが、第4・5・7トレントの所見では墳丘部の裾には自然層が露呈していた可能性が高い。最終的に墳丘部の裾を削り込んで調整する工法か、或いは土糞等による土留めを用いた工法が想定される。

テラスは旧地表土とローム漸位層上部を削ってロームを露呈させたもので、平均幅は4mと墳丘部に比較してかなり幅広なものである。その外側を巡る周堀の

外側が手つかずの旧地表面であったならば、外から見た本墳は、手前の周堀の対岸には一段低い土の露出した平坦面が墳丘部を巡る景観であつただろう。これは墳丘部をより腰高に見せる効果があったものとも考えられ、類似する構造は木の本7号墳（青木2000）にも見られる点からは、本地域における古墳築造の一派とも言えるのかも知れない。また、このテラスは石室前付近で幅が広くなっているようで、後述する周堀の陸橋部との関係からは、墓前祭祀における一定の「場」に供されていた可能性を感じさせる。

周堀は先述のテラス外側をほぼ溝状に巡っており、墳丘部の南南西、石室前庭部から墳丘を背に見た時の右斜め前方には掘り残しによる陸橋部、さらにその西方には浅いながらも外側に広がる箇所がある。また、深さもトレントによって異なっており、細かく見ると不揃いなものである。また、墳丘部西側に相当する第4トレントでは、その幅が他のトレントに比べて明らかに狭くなってしまっており、一つの可能性ではあるが、本墳西側に先行する古墳が存在していた為、これを避けて幅を減じているのかも知れない。その場合、流れ込み的に出土した埴輪の由来もこれに求められようか。

石室と前庭部については、考察1にて調査者が推定復元しているので詳細は譲るが、前庭部の前端と墳丘部の裾との間には幅狭ながら段が存在しており、これが墳丘部を全周する普遍的な施設なのか否かは明らかに出来なかった。

（永井）

4 出土遺物

今回の調査は、トレンチ調査ということもあり出土遺物も破片が主である。

第1トレンチ内で確認された石室内から完形の銅鏡、耳環のほか鉄鏃や刀子、鉄刀、刀装具の破片、歯牙、骨片などが出土している。前庭部からは須恵器模倣の土師器甕、埴丘上からは須恵器大慶片多数、埴丘据のトレンチからは、特に古墳の北西側を中心に埴輪破片が多少出土した。ただ、埴輪に関しては小破片で出土量も多くなく出土位置も偏ることから隣接古墳からの混入である可能性も考えられる。

第14図1～16は第1トレンチで確認された古墳の石室縹床やその覆土、石室前庭部から出土した遺物である。遺物の出土位置は第7図の石室周辺遺物出土状況図に図示した。1の前庭部出土の土師器甕はTK217型式期の東海産の須恵器甕の模倣で7世紀前半に相当する。

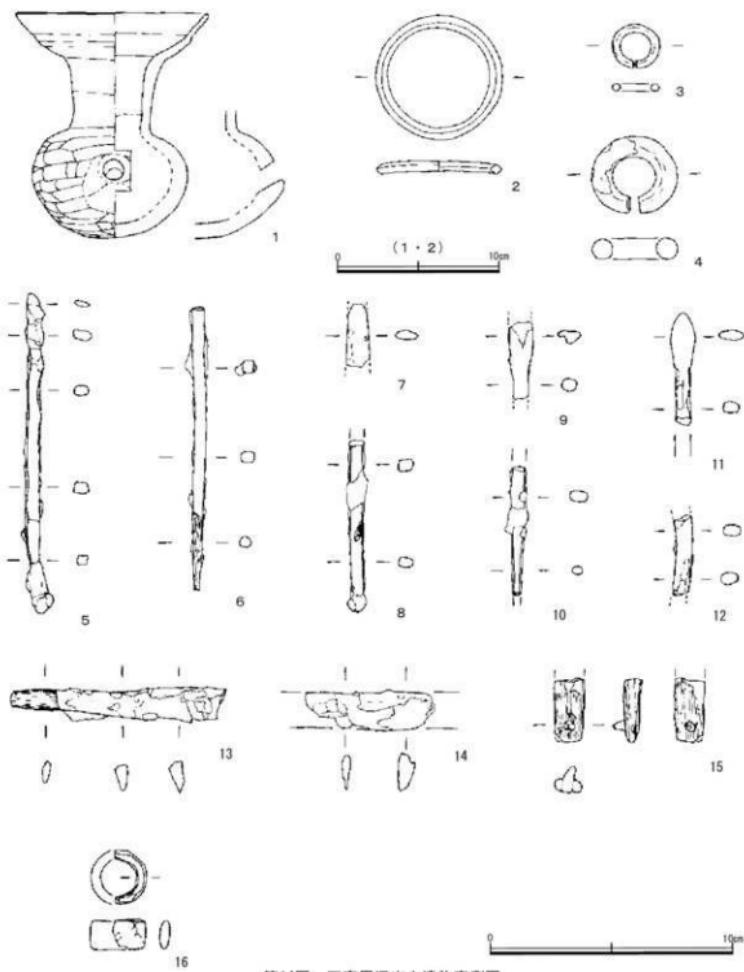
第14～18図1～59は各トレンチ一括の出土遺物で古墳に關係ある遺物をまとめたものである。第14図1～12は第1トレンチ出土遺物、第15図13～17は第1トレンチ東拡張部出土遺物、第15図18・19は第2トレンチ出土遺物、第15図20～25は第3トレンチ出土遺物、第16図26・27は第4トレンチ出土遺物、第16図28～39は第5トレンチ出土遺物、第17図40～42は第6トレンチ出土遺物、第17図43～52は第7トレンチ出土遺物、第18図53～56は第8トレンチ出土遺物、第18図57～59がトレンチ外出土遺物である。

第19図1～19は各トレンチ一括の出土遺物で古墳とは關係ない時代の遺物である。II～16のかわらけはかつて墳頂に祀られていた氏神様に關係する遺物と思われる。遺物の詳細は遺物観察表にまとめてあるので参照にされたい。

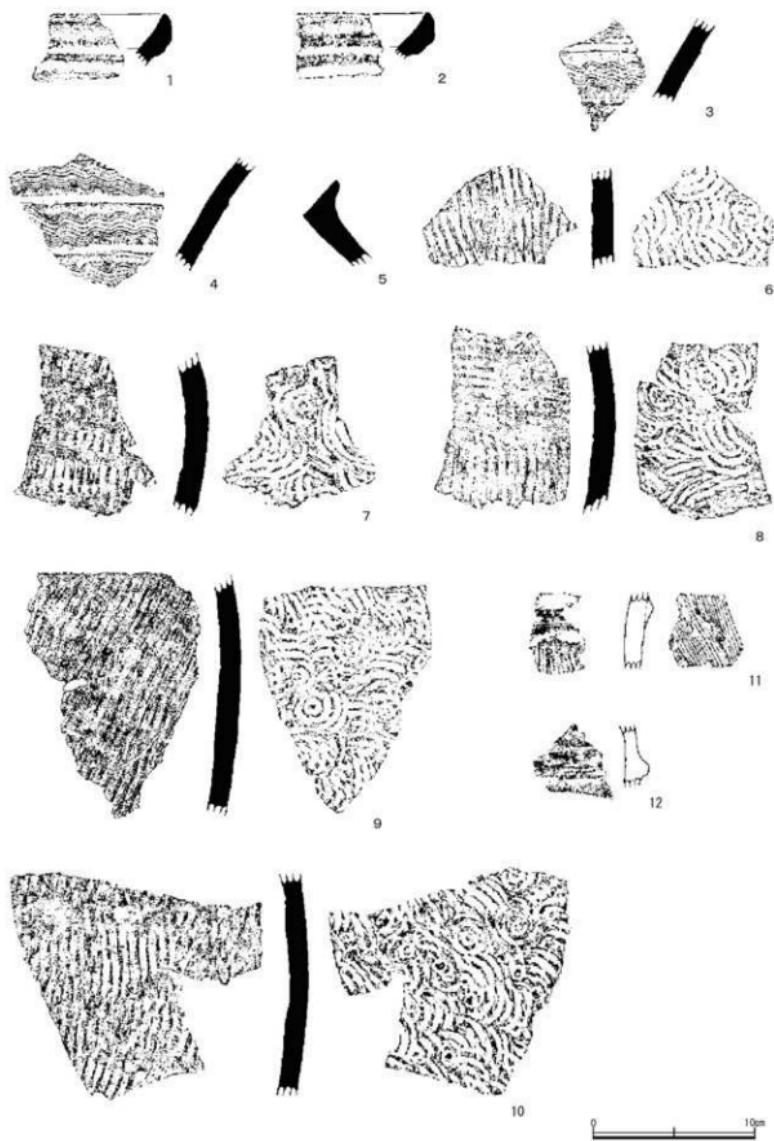
(幾島)

番号	器種	口径	器高	底径	胎	土	焼成	色調	残存	備考	出土位置
1	土師器甕	12.0	13.9	9.6	A B E H	良好	橙褐色	95%	輪縫整形、頸～口縁部内外面ナデ、胴部外面へラ削り、底部被熱により黒化	国示1	
2	銅鏡	径7.8	幅0.8	厚0.6	重量45.84g		完形				国示2
3	金銅製耳環	長1.8	幅1.9	厚0.4	重量3.13g		完形				覆土
4	金銅製耳環	長3.2	幅3.6	厚0.9	重量36.02g		完形				国示9
5	鉄鏃	長13.2	幅0.8	厚0.5	重量10.47g					頭～身部	国示8
6	鉄鏃	長(11.7)	幅0.9	厚0.6	重量8.50g					身部 一部に木質残存	国示5
7	鉄鏃	長(2.6)	幅1.0	厚0.4	重量1.66g					頭部	覆土
8	鉄鏃	長(7.1)	幅0.9	厚0.5	重量6.40g					身部、一部に木質残存	国示7
9	鉄鏃	長(3.1)	幅1.0	厚0.6	重量3.33g					頭～身部	覆土
10	鉄鏃	長(5.3)	幅0.9	厚0.5	重量2.91g					身部	国示3
11	鉄鏃	長(4.7)	幅1.1	厚0.5	重量3.28g					頭部	国示6
12	鉄鏃	長(3.3)	幅0.7	厚0.5	重量2.87g					身部	覆土
13	刀子	長(8.0)	幅1.5	厚0.6	重量11.20g					刃～茎部、茎部に木質残存	覆土
14	刀子	長(5.4)	幅1.7	厚0.7	重量7.73g					刃部	国示4
15	鉄刀	長(2.6)	幅1.2	厚0.7	重量4.77g					茎尻部、全体に木質残存、目釘残存	覆土
16	環状鉄製品	径(2.3)	幅1.2	厚0.4	重量3.90g					環の内側に木質残存、刀装具か	覆土

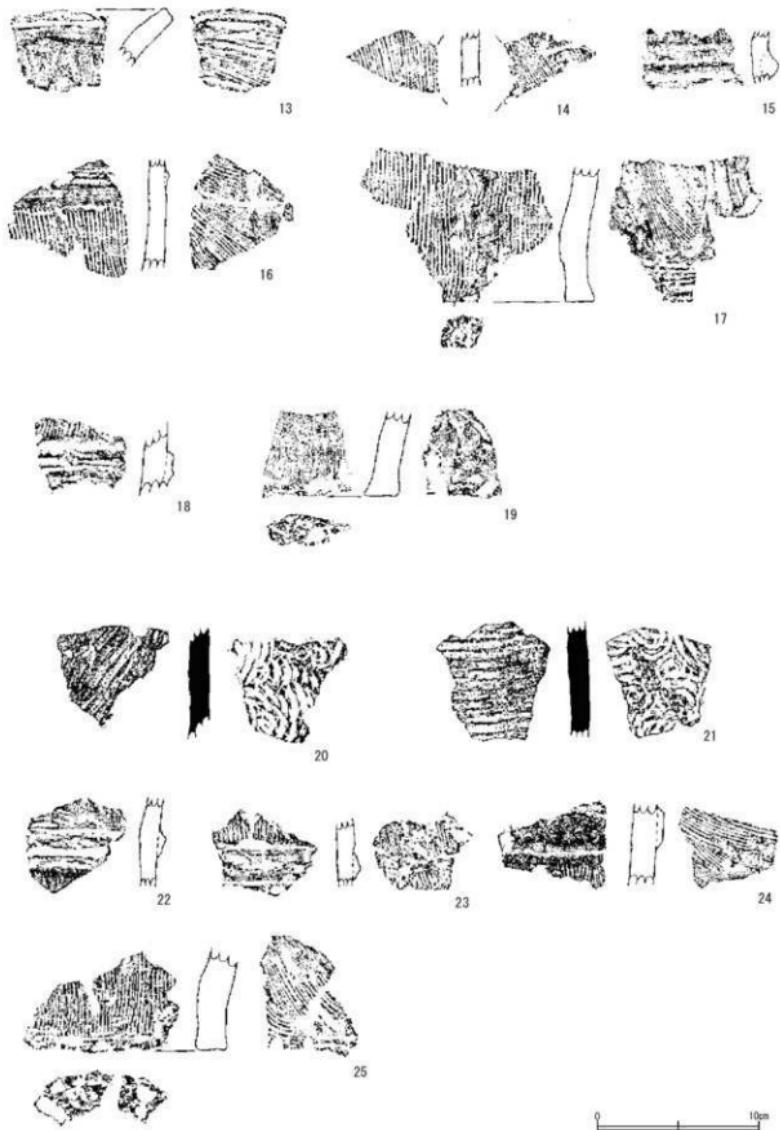
第3表 石室周辺出土遺物観察表



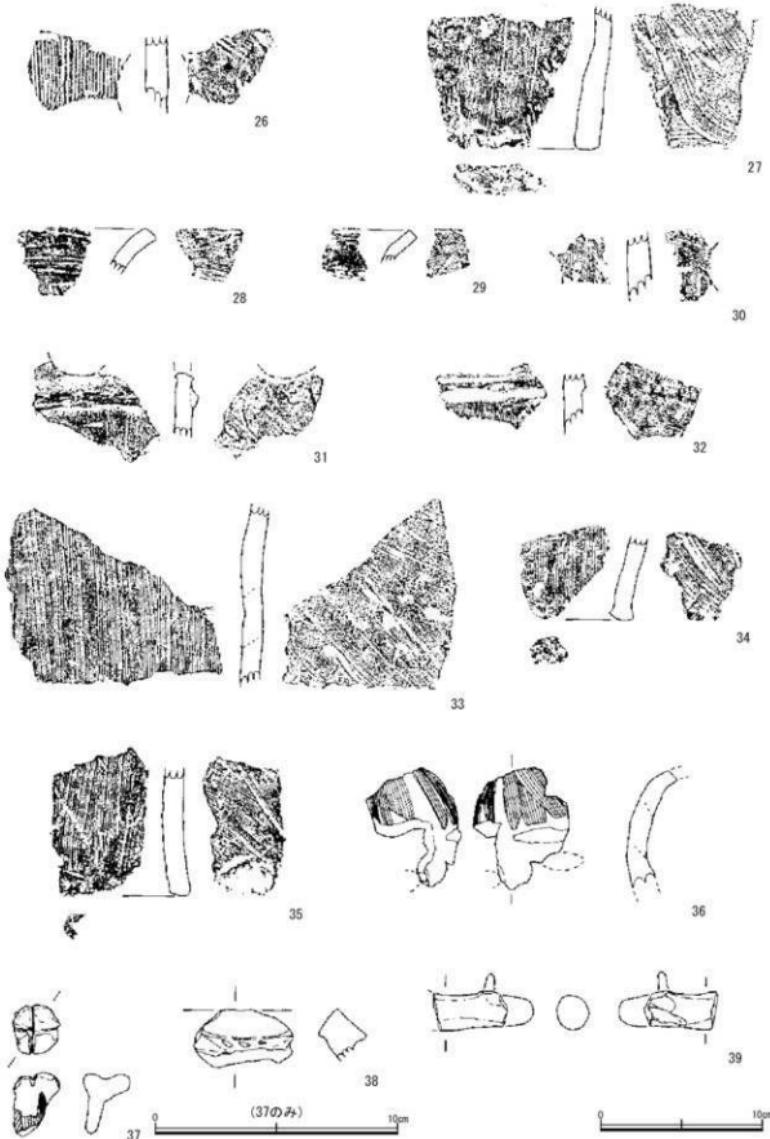
第14図 石室周辺出土遺物実測図



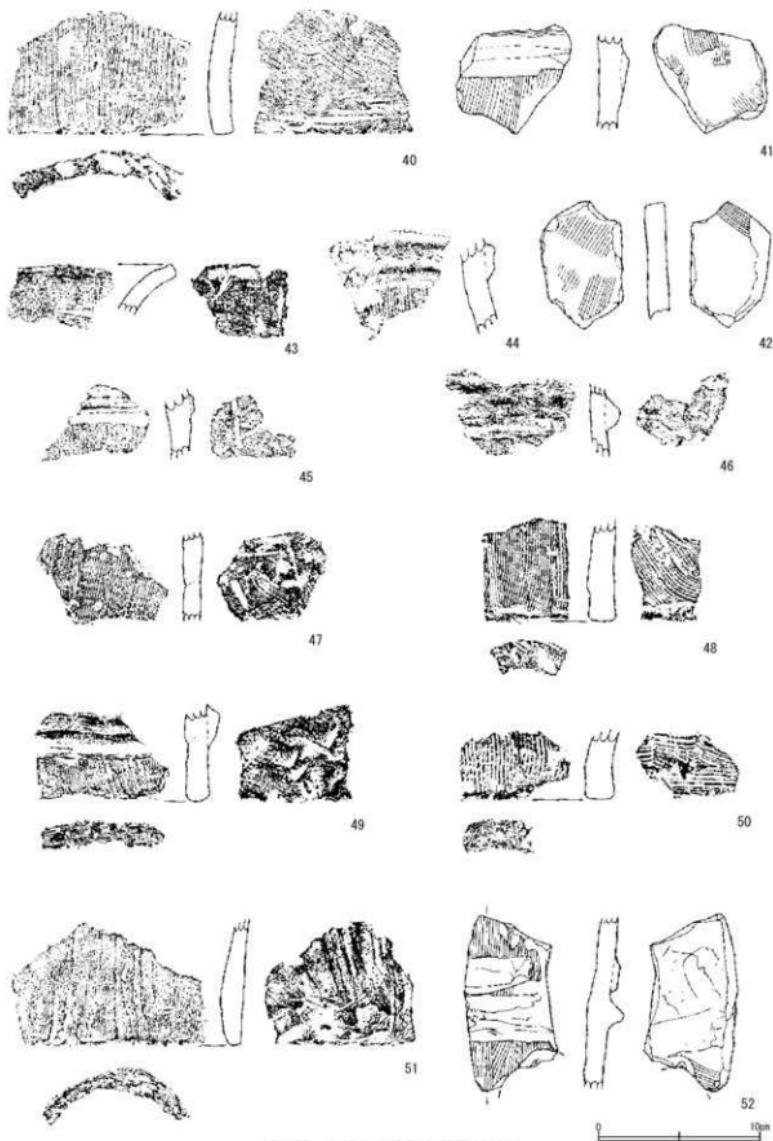
第15図 古墳出土遺物実測図(1/5)



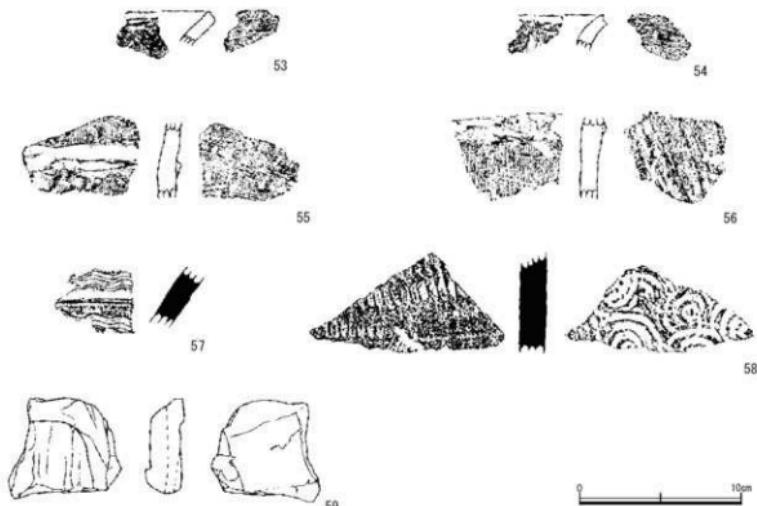
第16図 古墳出土遺物実測図(2/5)



第17図 古墳出土遺物実測図(3/5)



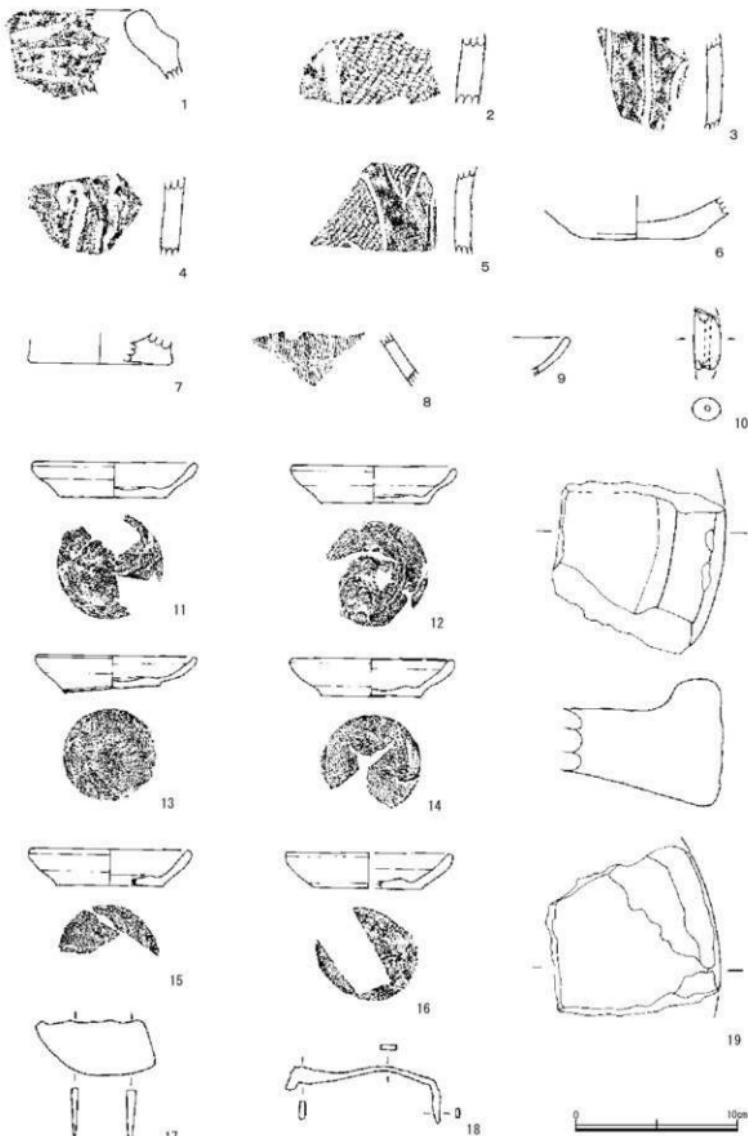
第18図 古墳出土遺物実測図(4/5)



第19図 古墳出土遺物実測図(5/5)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	出土位置
1	須恵器甕	-	残3.3	-	A CH	良好	暗灰色	口縁部		1 Tr
2	須恵器甕	-	残2.7	-	A C D H	良好	暗灰色	口縁部	外面柳描波状文	1 Tr
3	須恵器甕	-	-	-	A H	良好	暗灰色	口縁部	外面柳描波状文	1 Tr
4	須恵器甕	-	-	-	A H	良好	暗灰色	口縁部	外面ナデ、内面ナデ	1 Tr
5	須恵器甕	-	-	-	A B E H	良好	暗灰色	頸部	外面叩き目、内面青海波文	1 Tr
6	須恵器甕	-	-	-	A B H	良好	灰褐色	胴部	外面叩き目、内面青海波文	1 Tr
7	須恵器甕	-	-	-	A H	良好	暗灰色	胴部	外面叩き目、内面青海波文	1 Tr
8	須恵器甕	-	-	-	A B D H	普通	淡茶褐色	胴部	外面叩き目、内面青海波文	1 Tr
9	須恵器甕	-	-	-	A B H	良好	暗灰色	胴部	外面叩き目、内面青海波文	1 Tr
10	須恵器甕	-	-	-	A B D H	良好	暗灰色	胴部	外面叩き目、内面青海波文	1 Tr
11	円筒埴輪	-	-	-	A B E H	普通	橙褐色	帯部	外面タテハケ、内面ナナメハケ、突帯三角形	1 Tr
12	形象埴輪	-	-	-	A B E H	普通	培根褐色	-		1 Tr
13	円筒埴輪	-	残3.5	-	A B E H	良好	淡橙褐色	口縁部	外面タテハケ、内面ヨコハケ	1 Tr 東拡
14	円筒埴輪	-	-	-	A B E H	良好	橙褐色	胴部	外面タテハケ、内面ナナメハケ、透孔	1 Tr 東拡
15	形象埴輪	-	-	-	A B E H	普通	橙褐色	-		1 Tr 東拡
16	円筒埴輪	-	-	-	A B E H	良好	淡茶褐色	帯部	外面タテハケ、内面ナナメハケ、突帯M字形	1 Tr 東拡
17	円筒埴輪	-	残8.4	-	A B E H	良好	赤褐色	基部	外面タテハケ、内面ナナメハケ	1 Tr 東拡
18	円筒埴輪	-	-	-	A B E H	良好	赤褐色	帯部	外面タテハケ、突帯M字形	2 Tr
19	円筒埴輪	-	残5.3	-	A B H	良好	淡橙褐色	基部	外面タテハケ、内面ヨコハケ	2 Tr

第4表 古墳出土遺物観察表(1/2)



第20図 トレンチ出土遺物実測図

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	出土位置
20	須恵器甕	-	-	-	AH	良好	灰褐色	胴部	外面部叩き目、内面部青海波文	3 Tr
21	須恵器甕	-	-	-	AH	良好	暗茶褐色	胴部	外面部叩き目、内面部青海波文	3 Tr
22	円筒埴輪	-	-	-	ABEH	良好	淡茶褐色	帯部	外面部タテハケ、内面部ナデ、突堤M字形	3 Tr
23	円筒埴輪	-	-	-	ABH	普通	淡茶褐色	帯部	外面部タテハケ、内面部ナメハケ、突堤三角形	3 Tr
24	円筒埴輪	-	-	-	ABEH	普通	淡茶褐色	帯部	外面部タテハケ、内面部ナメハケ、突堤台形	3 Tr
25	円筒埴輪	-	残6.8	(11.9)	ABH	普通	赤褐色	基部	外面部タテハケ、内面部ナメハケ	3 Tr + 2 Tr
26	円筒埴輪	-	-	-	ABEH	良好	暗茶色	胴部	外面部タテハケ、内面部ナメハケ、透孔	4 Tr
27	円筒埴輪	-	残8.9	(11.2)	ABEH	良好	橙褐色	基部	外面部タテハケ、内面部ナメハケ、ヨコハケ	4 Tr
28	円筒埴輪	-	残2.7	-	ABEH	普通	暗褐色	口縁部	外面部タテハケ、ナデ、内面部ヨコハケ、ナデ	5 Tr
29	円筒埴輪	-	残2.2	-	ABCDEH	普通	淡褐色	口縁部	内面部ナデ、ヨコハケ	5 Tr
30	円筒埴輪	-	-	-	ABEH	良好	淡茶褐色	胴部	外面部タテハケ、内面部ヨコハケ、透孔	5 Tr
31	円筒埴輪	-	-	-	ABCE	普通	淡褐色	帯部	外面部タテハケ、内面部ナメハケ、突堤三角形、透孔	5 Tr
32	円筒埴輪	-	-	-	ABEH	良好	淡茶褐色	帯部	外面部タテハケ、内面部ナメハケ、突堤三角形	5 Tr
33	円筒埴輪	-	-	-	ACDEH	普通	淡茶褐色	胴部	外面部タテハケ、内面部ナメハケ、ヨコハケ	5 Tr
34	円筒埴輪	-	残5.2	-	ABCDEH	良好	淡茶褐色	基部	外面部タテハケ、内面部ナメハケ	5 Tr
35	円筒埴輪	-	残7.9	-	ABDEH	良好	淡褐色	基部	外面部タテハケ、内面部ナメハケ	5 Tr
36	人物埴輪	-	-	-	ABEH	良好	淡茶褐色	顔部	外面部タテハケ、内面部ナデ	5 Tr
37	形彫埴輪	-	-	-	ABEH	良好	淡褐色	-	馬型埴輪の立像か	5 Tr
38	形彫埴輪	-	-	-	ABEH	良好	淡褐色	-	-	5 Tr
39	人物埴輪	-	-	-	AEH	良好	淡茶褐色	胴部	-	5 Tr
40	円筒埴輪	-	残7.6	(13.9)	ACEH	普通	淡褐色	基部	外面部タテハケ、内面部ナメハケ	6 Tr
41	形象埴輪	-	-	-	ABCE	良好	淡褐色	-	外面部タテハケ、内面部ナメハケ、ヨコハケ、ナデ、突堤三角形	6 Tr
42	形象埴輪	-	-	-	ABE	良好	淡褐色	-	内面部ナメハケ	6 Tr
43	円筒埴輪	-	残3.0	-	ABDEH	良好	淡茶褐色	口縁部	外面部タテハケ、内面部ヨコハケ	7 Tr
44	円筒埴輪	-	-	-	ABEH	普通	淡茶褐色	帯部	外面部タテハケ、突堤M字形	7 Tr
45	円筒埴輪	-	-	-	ABCE	普通	淡茶褐色	帯部	外面部タテハケ、内面部ナメハケ、突堤M字形	7 Tr
46	円筒埴輪	-	-	-	ABEH	良好	淡茶褐色	帯部	外面部タテハケ、内面部ナデ、突堤台形	7 Tr
47	円筒埴輪	-	-	-	ABEH	普通	暗褐色	胴部	外面部タテハケ、内面部ナメハケ、ヨコハケ	7 Tr
48	円筒埴輪	-	残6.8	-	ABEH	良好	淡褐色	基部	外面部タテハケ、内面部ナメハケ	7 Tr
49	円筒埴輪	-	残6.0	-	ACEH	良好	淡褐色	基部	外面部タテハケ、内面部ヨコハケ、突堤台形	7 Tr
50	円筒埴輪	-	残4.2	-	ABEH	普通	暗褐色	基部	外面部タテハケ、内面部ヨコハケ	7 Tr
51	円筒埴輪	-	残7.8	(9.2)	ABEH	良好	暗褐色	基部	外面部タテハケ、内面部ナデ	7 Tr
52	形象埴輪	-	-	-	ACEH	良好	淡褐色	-	外面部タテハケ、透孔	7 Tr
53	円筒埴輪	-	残2.2	-	ABEH	普通	淡褐色	口縁部	外面部タテハケ、内面部ヨコハケ	8 Tr
54	円筒埴輪	-	残2.1	-	ABEH	普通	淡茶褐色	口縁部	外面部タテハケ、内面部ヨコハケ、ナデ	8 Tr
55	円筒埴輪	-	-	-	ABCEH	良好	淡茶褐色	胴部	外面部タテハケ、内面部ナデ、突堤三角形	8 Tr
56	円筒埴輪	-	-	-	ABCEH	普通	淡茶褐色	帯部	外面部タテハケ、内面部M字形	8 Tr
57	須恵器甕	-	-	-	AH	良好	暗灰褐色	口頭部	外面部標榜波状文	南去探
58	須恵器甕	-	-	-	ABH	良好	暗茶褐色	胴部	外面部叩き目、内面部青海波文	埴丘上表土
59	形象埴輪	-	-	-	ABCDEH	普通	暗褐色	-	木ノ本3号墳	-

第5表 古墳出土遺物観察表(2/2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	出土位置	
1	縄文土器	-	残4.0	-	ABEH	普通	淡褐色	口縁部	-	2 Tr	
2	縄文土器	-	-	-	EH	普通	淡褐色	胴部	-	2 Tr	
3	縄文土器	-	-	-	ABE	良好	淡褐色	胴部	-	1 Tr	
4	縄文土器	-	-	-	ABEH	普通	黒褐色	胴部	-	1 Tr 東塗	
5	縄文土器	-	-	-	EIH	良好	淡褐色	胴部	-	5 Tr	
6	縄文土器	-	残2.7	(8.0)	DEFH	普通	黒褐色	底部	-	1 Tr	
7	縄文土器	-	残4.0	(9.0)	ABEH	普通	暗褐色	底部	-	6 Tr	
8	弥生土器	-	-	-	ABDE	良好	淡茶褐色	胴部	外面部描文	5 Tr	
9	灰釉壺	-	-	残2.3	-	ABE	良好	淡褐色	口縁部	輪郭整形	2 Tr
10	土壺	長(3.8)	幅1.7	厚1.4	ABCDE	良好	淡褐色	-	-	2 Tr	
11	かわらけ	10.3	2.2	6.7	ABE	良好	淡褐色	80%	輪郭整形、底部系切、外面部被然	1 Tr 東塗	
12	かわらけ	10.3	2.3	6.7	ABE	良好	淡褐色	85%	輪郭整形、底部系切、外面部被然、歪みあり	1 Tr 東塗	
13	かわらけ	(10.1)	(2.4)	6.1	ABE	良好	淡褐色	65%	輪郭整形、底部系切、外面部被然、歪みあり	1 Tr 東塗	
14	かわらけ	(10.3)	(2.4)	6.2	ABE	良好	淡褐色	65%	輪郭整形、底部系切、外面部被然	1 Tr 東塗	
15	かわらけ	(10.2)	(2.3)	(6.7)	ABE	良好	淡褐色	40%	輪郭整形、底面部歪、外面部被然	1 Tr 東塗	
16	かわらけ	(10.4)	2.2	(6.5)	ABE	良好	淡褐色	60%	輪郭整形、底部系切、外面部被然	1 Tr 東塗	
17	鉄製品	長7.5	幅3.5	厚0.6	重量22.97g	-	-	-	-	埴丘上表土	
18	鏡	長9.6	幅1.1	厚0.4	重量22.28g	-	-	-	-	5 Tr	
19	石臼	-	7.9	-	重量836.33g	-	-	10%	安山岩製	1 Tr 東塗	

第6表 トレンチ出土遺物観察表

IV 結語

木の本古墳群の現状

木の本古墳群は平成20年12月現在、13基の古墳が発掘調査されている。調査事例の多い楓山神社周辺の一群（社前支群）や東端の幡羅遺跡周辺の一群（森吉支群）では、5世紀末頃～6世紀前半の帆立貝式古墳を中心とした円墳群が広がっているようだ。木の本古墳群がいわゆる古式群集墳として造営が開始される事を教えてくれる。一方で今回報告した木の本3号墳を含む熊野神社周辺の一群（木の本支群）は、調査事例こそ少ないが採集される埴輪の特徴、石室石材の存在や断片的な伝承にもとづく埋葬施設の構造（註1）からは、6世紀後半～7世紀代の横穴式石室をもつ新式群集墳と考えられ、時期によって墓域を移動させている可能性も考えられる。しかし広大な古墳群に対して調査面積は微かであり、これまで不明な点の多い古墳群であった。

木の本3号墳の調査成果のまとめ

今回調査した3号墳は、地山削り出しによる幅広のテラスを巡らす円墳と判断したが、南西側に張出部が付く可能性や方墳の可能性も考えられ、今後の課題となる。しかしながら、埋葬施設である横穴式石室の正式な調査としては木の本古墳群で初の事例となり、胴張りプランの河原石積と判明した。

石室内の遺物の残存状況は、近世の石抜きと考えられる盜掘を受けているものの、比較的良好であり、完形の銅鏡・耳環、破片であるが鉄鏃・刀子・鉄刀・刀装具や人骨、歯牙が出土した。歯牙はその鑑定によって成人3人分が確認され、内2人は男性、残る1人は性別不明であった。（考察2を参照）

また、前庭部からは須恵器模倣の土師器龜がほぼ完全品で出土し、供獻土器と考えられる。

時期的には、石室の平面形が胴張りの小判型である点や、埴輪を伴なわない可能性が高い点から7世紀代

の築造は確実であろう。また築造時期との時期差を考慮すべきとは言え、土師器龜はTK217型式期の東海産を模倣したと考えられる。以上の点から木の本3号墳は、7世紀前半の築造と判断されよう。

若干の考察

本墳の特徴としては、石室側壁に荒川水系の河原石を、床面に利根川水系の角閃石安山岩の小転石を数いている点と、銅鏡や土師器龜のような特徴的な遺物の出土が挙げられる。

横穴式石室 本墳の横穴式石室に2種類の産地の異なる石材を使用している点は、石材流通が地域首長の掌握の元で行われていたと考えた場合、興味深い現象である。本墳の場合、主体となる側壁の構築は荒川水系の石材である事を考慮すれば、荒川沿いに普遍的な石室のタイプ（荒川扇状地タイプ）として理解され、その分布範囲としては北西端に相当する（詳細は考察1を参照）。しかし床面には、利根川流域の石室構築材として使用される事の多い角閃石安山岩を使用しており、側壁構築材に比べればはるかに少ない使用量とは言え、利根川沿いの地域との関係性を窺わせる。先の石材流通が地域首長の掌握の元で行われていたという考え方方に立つならば、必然的に本墳の被葬者は、荒川扇状地を中心とした地域に所属しながらも、利根川沿いのいわゆる妻沼低地と関係性の強い人物像が想起され、後の幡羅郡の領域を含め注目される。

銅鏡 出土遺物のうち副葬品である銅鏡は、周辺地域では偏った出土を示すものである。北武藏の群集墳から鉄刀や鉄鏃・玉類などが副葬品として出土する事は一般的であり、出土例の少ない馬具や装飾付太刀等の威信材的な副葬品は、当然ながら階層的に上位と考えられる。本墳でも出土している銅鏡も、あるいは馬具等の特殊な副葬品の1つと理解し、階層に結びつけることも可能かと思う。ちなみに周辺地域における銅鏡出土古墳としては、深谷市内では小前田9号墳と黒

田11号墳、四十塚古墳群内出土品が知られ、隣接の熊谷市では石原・坪井古墳群の薬師堂古墳や三ヶ尻林4号墳（やねや塚古墳）、荒川を越えた比企丘陵の塙古墳群の西原18号墳で認められ、西原18号墳では馬具を伴う。これらの銅鏡出土古墳は全て円墳で、群集墳を構成する1基であるとは言え、墳丘の規模や共伴する副葬品からは主墳的な存在である。つまり銅鏡は、馬具や装飾付太刀にこそ劣るとは言え、一定の威信材として看做し得ることはできるだろう。なお、時期的にはTK10型式期の須恵器模倣の土師器龜を出土した6世紀中葉の小前田9号墳を皮切りに、6世紀末頃と考えられる三ヶ尻林4号墳や西原18号墳まで認められ、石室の形態や土師器龜から7世紀前半に位置づけられる本墳の出土例は、北武藏における銅鏡としては最新段階に位置づけられる例である。

以上の銅鏡の検討からは、本墳は木の本古墳群中でも主墳的な古墳の1つと考えられ、墳丘部に比して幅広いテラスを巡らせ、周囲内径30mというあたかも見かけの規模を大きく見せるかのような築造方法も、被葬者の社会的地位や関係性に起因する可能性があるのかも知れない。

土師器龜 前庭部から単独で出土した土師器の龜は、ほぼ完形で出土しており、東日本の後期古墳における石室前面での土器出土状態として一般的な、破砕を受けていない点は注目される（註2）。

想像遡しく推察すれば、破砕された土器は埋葬と時を同じくする葬送儀礼が執り行われた後、ケガレを忌み嫌ってその場で器の機能を止めた結果と理解されよう。とすれば石室前面からの出土であるにもかかわらず完形である本墳の土師器龜は、埋葬後の追善供養に伴い手向けられた可能性が高い。だとすれば、この土器の示す時期は、本墳の築造より多少新しい可能性はあるだろう。

またこの土器は、器種やその器形から須恵器模倣であり、口縁部がラッパ状に外反する点や、注口部周囲が盛り上る特徴からは湖西等の東海地方の龜を手本として忠実に模倣したものと考えられる。口縁部外面が

有段口縁杯に似た木口状工具による整形で、土師器製作者の手によるものと推察されるが、器面調整が該期の土師器に一般的な粗いヘラケズリのままの状態ではなく、ケズリの後に丁寧な指ナデによって平滑に仕上げており、その手数の多さからは通常の土師器の製作・分配に乘らない、特注品なのだろう。さらに須恵器ではなく土師器という意味も興味深い問題である。古墳での墓前祭祀における需要が、在地における須恵器生産の契機となるという大方の指摘に従えば、限りなく須恵器龜に似せた土師器龜の出土は、短絡的だが本墳の被葬者が須恵器を入手することができなかつた為と考えることも可能であろう。類例としては本墳より半世紀以上古い事例ではあるが小前田9号墳で報告されており、荒川水系の河原石積の石室で、副葬品に銅鏡を含むという3点で本墳との共通点が見出せる。あるいは時期を越えた、同じ石室を採用する古墳での埋葬観念が根底にあるのかも知れない。墓前祭祀等に須恵器を用いていない（ないしは用いることができなかつた）被葬者像の社会的位置や階層は、今後周辺古墳の例を精査した上で、改めて検討する必要があろう。

歴史的背景への予察

本墳の歴史的背景については、東約1kmに位置し時期的にも近い、古代幡羅郡の郡家跡である幡羅遺跡との関係を抜きにしては語れない。幡羅郡は上秦、下秦、広沢、佐原、幡羅、那珂、霧見、余戸の8郷からなり、木の本古墳群を含む深谷市原郷付近は幡羅郷に比定されている。この場合、台地上での集落遺跡は幡羅遺跡の周辺を除いてほとんど知られていない事から、郷としての主体は台地下の妻沼低地内の遺跡群に求められるのだろう。妻沼低地内の自然堤防上では古墳時代後期以来の大規模な集落遺跡の調査事例が多く、奈良・平安まで連綿と続く伝統的な集落遺跡も少なくない。いずれにせよ古代幡羅郡においては中枢をなすエリアの1つであったとのものと考えられる。（知久2006などによる）

こうした歴史的背景を踏まえた上で木の本古墳群に

話を戻すと、5世紀末に始まる木の本古墳群は、妻沼低地を開発した伝統的な在地勢力によって累々と營まれた墓域と結論づけられる。彼ならいしはその末裔は、当然やがて来るる幡羅郡家の建設へ深く関与したであろう事は想像に難くない。

その場合、幡羅郡家南方に位置し、八角墳を含み双脚足金物付の装飾大刀を出土した龍原裏古墳群は、7世紀後半に至って忽然と造営が開始される墓域であり、木の本古墳群とは対極的な在り方は注目に値しよう。時期的にも郡家の造営に關係する有力者を含む集団の墓域と考えられ（註3）、外来的な要素を考えたいところだが、考察1での検討でも明らかのように、埋葬施設に荒川扇状地タイプとした河原石積の横穴式石室のみを採用しており、在地の伝統に則ったものである。ひとつの仮説として、石室を中心とした造墓集団と被葬者は別であると考え、龍原裏古墳群を郡家設置に関わる外来的有力者によって短期的に營まれた墓

域として捉えておきたい。

また、上円下方墳の宮塚古墳や藏手刀出土古墳を含む広瀬古墳群も注目すべき存在だが、墳形に外来かつ新米の要素を強く見せる反面、群内に埴輪樹立古墳を含むという点で伝統的な要素もあり、混沌とした感は否めないところである。

今回報告した木の本3号墳をはじめ、ここで俎上に上げた「終末期古墳」は、繰り返すが時期的には幡羅郡設置という、地域史上の一大画期とその直前に相当する。今回のさやかな検討が、律令前夜ともいべき7世紀の幡羅郡を中心とした地域社会を解明する一助となるならば、調査・報告を担当した者としては望外の喜びである。

最後に、本調査にあたって多大なるご理解とご協力を賜った元地権者の方をはじめ、暖かく見守ってくれた地域住民の方々への感謝を明記して、ここに筆を置きたい。

（永井・幾島）

註

(1) 木の本古墳群における埋葬施設の情報としては、伝承等を含めて以下の5例があるので参考までに以下に挙げる。

①木の本5号墳を明治30年頃に土地所有者が発掘、直刀・刀子・金環が出土。石室の天井石であった網目片岩を古墳上の石碑に転用。河原石は石段に使用したようである。

②昭和20年代に古墳群の西端近くに所在する火の見塚古墳を土砂採集によって破壊した際、古墳中心から秩父青石を使用した箱式石棺が発掘され、良好な状態の男子人骨と直刀1・小刀1・鉄鎌1握が発見された（深谷市史編さん会1980）。同様の埋葬施設は児玉郡の中期古墳（生野山将軍塚・金鑽神社古墳）に多く、火の見塚古墳も中期古墳である可能性を考えておくべきかも知れない。また、破壊に立ち会った方の話によれば勾玉も出土したという話で、瑞穂光寺所蔵の市指定文化財の玉類があるいはこれに相当する可能性もある。

③楓山神社付近の古墳から、明治30年代に秩父石と輕石を使用した石棺が発掘されたと云う。輕石を角閃石安山岩と考えると、天井石に縁泥片岩を使用した利根川流域タイ

プの横穴式石室と考えられ、刀1本と円玉1個が出土したという（和田千吉1912）。他に『大里郡社誌』の楓山神社の項に、「塚には洞口ありて」の記述があり、同一古墳を示す可能性がある（埼玉県神職會大里郡支會1930）。

④木の本2号墳を昭和初期？、東京の大学が掘ったと地元では云う。当時の記録について不明だが、墳頂部にはクレーター状の穴があり、河原石と角閃石安山岩が散見される。木の本3号墳に類似した横穴式石室が想定される。

⑤Na116遭跡と市道の境に塚が設置された際、河原石による石室の断面が確認された。1995年頃、永井が目撃。今にして思えば、河原石積の荒川扇状地タイプの横穴式石室であったと推定される。

(2) 石室内に副葬品として持ち込まれたものは除外した。とはいえた石室内への土器の副葬は、東日本においては例外的で、同時期の畿内で石室内への須恵器副葬が一般的である現象とは対極的である。既に大方の指摘するように、東日本における横穴式石室の発達は、前庭部での墓前祭祀を促進させた。しかし石室内への土器副葬に代替と

して墓前祭祀の発達を理解して良いのかは躊躇される。畿内と東国における葬送観念の相違なのかも知れない。

(3) 報告者の松田哲氏も、報告書において同様の見解を示している。(熊谷市教育委員会2005)なお正式報告に先

立って発表された調査担当者である寺社下博氏の論考では、双脚足金物を伴う方頭大刀の検討から、東山道武藏道との関係を論じ、中央政権の地方支配を考えているようである。(寺社下1997)

参考文献

- 青木克尚1995『深谷市内遺跡Ⅶ』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第46集 深谷市教育委員会
青木克尚・永井智教・古池晋禄1996『下手計西浦遺跡』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第48集 深谷市教育委員会
青木克尚1996『深谷市内遺跡Ⅷ』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第50集 深谷市教育委員会
青木克尚1998『根岸遺跡(第2次)』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第56集 深谷市教育委員会
青木克尚2000『根岸遺跡(第3次・第4次)』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第61集 埼玉県深谷市教育委員会
青木克尚・永井智教2000『幡屋遺跡Ⅰ』深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第75集 深谷市教育委員会
江南町1995『江南町史』資料編 1考古 江南町
小久保徹ほか1983『三ヶ尻天王・三ヶ尻林』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第23集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
埼玉県1982『新編埼玉県史』資料編 2原始・古代 弥生・古墳 埼玉県
埼玉縣神職會大里郡支會1930『大里郡神社誌』埼玉縣神職會大里郡支會
埼玉県立さきたま資料館1994『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』埼玉県教育委員会
澤出晃越1991『深谷市内遺跡Ⅲ』深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第28集 深谷市教育委員会
寺社下博1997『地方の多角形墳』『生産の考古学』同成社
塙野博ほか1972『黒田古墳群』黒田古墳群発掘調査会
瀧瀬芳之1988『小前田古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第58集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
知久裕昭2006『北武藏における評の成立』『埼玉の考古学Ⅱ』埼玉考古学会 六一書房
知久裕昭2007『居立(2次) /森吉古墳/下郷』深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第92集 深谷市教育委員会
鳥羽政之ほか2005『四十塚古墳の研究』岡部町史資料調査報告書第2集 岡部町教育委員会
深谷市教育委員会2005『古墳時代の深谷』深谷市教育委員会
深谷市史編纂会1969『深谷市史』全 深谷市役所
深谷市史編さん会1980『深谷市史』追補編 深谷市役所
松田哲2005『籠原裏古墳群』平成16年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書 埼玉県熊谷市教育委員会
山本禎1991『埼玉県における後期古墳の様相』『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
和田千吉1912『武藏國大里郡上敷免發掘の埴輪』『考古学雑誌』第2卷6号 考古學會

考察1 木の本3号墳の横穴式石室構造とその位置づけ

はじめに

今回報告となった木の本3号墳からは、遺存状態は芳しくないと言え河原石積の横穴式石室が確認され、木の本古墳群における初の埋葬施設の発掘調査となつた。銅鏡の副葬（註1）や前庭部出土の土師器甌の形態から7世紀前半の築造と考えられ、5世紀後半の古式群集墳として造営が開始される木の本古墳群中では、新しい段階の古墳である（註2）。

本章は木の本3号墳の横穴式石室について、Ⅲ章の事実報告を補足し、系譜や分布・変遷についての検討を通じて歴史的位置づけを試みるものである。

（1）木の本3号墳の横穴式石室構造

まず、調査によって明らかとなった横穴式石室の構造的特徴を列挙したうえで、個々の特徴について簡単な検討を加える。

横穴式石室の構造的特徴

①玄室の平面プランは概略小判形を呈する顕著な胸張りで、羨道はやや短くて直線的、玄室長と羨道長の比率はおよそ2:1である。

②側壁は砂岩・チャート等の荒川由来と考えられる河原石で構築され、互目の小口積を基調としていた可能性が高い（註3）。側壁最大幅部分の基底石に大振りの河原石が複数に据え置かれる特徴があり、類例としては熊谷市立野4号墳（註4）がある。

③玄室と羨道の境界となる袖部は、やや大振りの河原石を積み重ねており、7世紀代に一般的な板状石材を組み合わせた玄門構造にはならない。

④奥壁は既に抜き取られ不明だが、抜き取り痕は直線的で、弧を描く側壁との間に不明瞭ながら屈曲点をもつ。従って結晶片岩等の板石を縦に設置し奥壁としていた可能性が考えられる。しかし抜き取り痕底面の状況からは大形石材とは考えられず、小ぶりな板石

を1ないし2段積んでいたと推定される。

⑤天井石については全く不明であるが、石室部分の擾乱土中には結晶片岩が含まれていたので、奥壁と同様にその板石を使用していた可能性は高い。

⑥玄室の床面構造は、旧表土由來の黒褐色土直上に裏込めと同質の砂礫を含むローム土を敷いて整地、その上に角閃石安山岩の拳大の転石を主体に、砂岩やチャートの小振りな河原石を交えた礫を敷く礫床である。羨道には玄室のような礫床は無く、玄室礫床下の整地土と同質の土床となる。なお、玄室と羨道の境は河原石を2段積んだ樋石で、羨道から一段下がって玄室へ至る構造である。閉塞施設の遺存状態も芳しくないが、いくつかの河原石が石室主軸と同じ方向で残されており、樋石を生かして河原石を小口積して羨道内を充填する構造であつたらしい。

⑦石室の構築面は、旧地表の側壁ライン外側を浅く掘り窪め、外に向かうにつれて浅くなるように削り込んだ状態である。つまり石室部分が島状に掘り残された特異な構造で、この高まりに沿って基底石を直に並べていることから、この造作は石室の平面形態を決定する意味と、基底石を安定した地盤に据える為の配慮と考えられ、いわゆる壠形ではない。

なお、石室と墳丘の位置関係は、奥壁背後が墳丘中央に相当し、北武藏の小円墳の設計方法としては古相の「奥壁中心型」（永井2005b）である。

⑧側壁の控えは砂利で裏込められており、使用量は少なく、控え積みと呼ばれるような裏込めを被覆する石積も存在していない。砂利はいわゆる腐れ礫を含まない未風化なもので、側壁石材と同様に荒川河川敷から採集され搬入されたと推定される。熊谷市三ヶ尻林5号墳（小久保ほか1983）では、周堀内的一部を深堀して裏込めの砂利を礫層から採集しているが、本墳の場合は地山の礫層まで深い為、裏込め材も搬入せざるを得なかつた為と推定される。

⑨羨門の外には掘り割り状を呈する土壁の前庭部が設けられ、その底面は石室から離れるに従いレベルの

下がる緩いスロープ状をなし、前端には荒川水系主体の河原石（角閃石も僅か含む）で葺石状の石積が施され、その下端がテラス面となる。なお、周囲は石室前方右で途切れ、陸橋状となっている。

個々の構造的特徴の検討

次に上記9点について簡単に検討する。①～④に挙げた平面が小判形の胴張りプランで河原石積といった特徴は本墳石室の基本的な構成要素となる。

類例として、市域では荒川右岸の著名な群集墳である鹿島古墳群（塩野ほか1972・村松2004・2005）、熊谷市域では本古墳から距離的には近い荒川左岸の籠原裏古墳群（松田2005）、三ヶ尻古墳群（小久保ほか1983）、肥塚古墳群（松田2001）、鹿島同様に荒川以南の例であるが和田吉野川右岸の江南台地上に位置する上前原古墳群（森田2006）、さらに南方の江南台地内の和田川左岸に位置する立野古墳群（新井・森田2005）、荒川左岸のやや上流に位置する寄居町樋ノ下古墳群（岩田ほか1994）等多くの事例が確認され、概ね荒川の中流域（荒川扇状地）に特徴的である点からは荒川扇状地タイプとすべき石室である。

ちなみに、角閃石安山岩の加工石材を使用するという点で根本的に異なるが、本墳北方の妻沼低地に位置する深谷市上増田9号墳（古池ほか1991）、櫛引台地上の北西寄りに位置する熊野古墳群中の平塚古墳（黒沢1962）、四十塹6号墳（鳥羽ほか2003）も小判形胴張りプランである。石材とその使用方法における特徴は上野地域（利根川流域）と同じだが、荒川扇状地と共に通する点も多い。互いの影響関係を考慮しなければなるまい。

③の袖部については、荒川扇状地や外秩父山地に接する藤岡児玉地域等の、結晶片岩の多い地域で一般的な玄門構造でない点は注目される。特に荒川扇状地では緑泥片岩（結晶片岩の一種）と呼ばれる石材が多く石室に使用され、荒川の水運によって遠方まで供給されている（田中1989）。本墳石室が結晶片岩の玄門でない理由は、荒川流域から西に大きく外れたその位置に起因する為とも推定され、本墳で確認された結晶片岩が全て鈍銀色の脆いものであった点は、荒川経由で

の良質な緑泥片岩の供給を受けられなかった事を暗示するかのようである。

⑥の床面構造では、特に礫床に使用される石材が問題であろう。拳大の転石であるとは言え、利根川系の石材である角閃石安山岩を主体的に使用する点である。角閃石安山岩の転石を選択的に床面礫床に用いる古墳としては、利根川の本流に近い行田市の酒巻1号墳（埼玉県1982）と同21号墳（門脇ほか1994）があり、前者は側壁が角閃石安山岩の加工石材を積んだ利根川流域のタイプであるが、後者は河原石を積んだ荒川扇状地の系統で、本墳に類似する。

対岸の上野地域でも同様の事例は多く存在するが、全て側壁が角閃石安山岩の加工石材を積む石室で、上野地域の西半を中心とした利根川中流域に広く分布する特徴（尾崎1966・若松1982・右島1993）から、利根川流域タイプといるべき石室である。これを踏まえれば、本墳の石室床面に角閃石安山岩が選択的に用いられた背景は、やはり利根川流域との関わりを考慮する必要がある。とは言えこの角閃石安山岩の転石は、供給源である榛名山二ッ岳形成期の噴火以降（註5）の利根川河川敷には普通に存在する石材であったので（秋池2000）、むしろ古墳建築者が利根川の河川敷において、石材を選択採集できる社会情勢であったと評価すべきなのかも知れない。

⑦の石室構築面の状態は特徴的であるが、如何せん部分調査の為に不確定な部分が多い。石室部分が島状となる下部構造という点で類似する例に、角閃石安山岩を使用した利根川流域タイプの石室である本庄市小島の御手長山古墳（長谷川ほか1978）や、同市の御堂坂2号墳（増田1990）等がある。しかしこれら二例は盛土によって島状の高まりを作り出すものであり、削り出しによる本墳の例とは異なる。また、利根川対岸の利根川流域タイプの伊勢崎市櫻1号墳では、石室内側部分がかなり高い島状に掘り残される特異な構造が確認されており（註6）、石室部分を掘り残す意図という点での共通点は見出せる。以上の事例からは、石室部分を島状に造作する下部構造は、利根川流域タイプに多いのかも知れない。石材の種類を越えた平面プランの共通性や床面石材の問題も含め、本墳の石室が

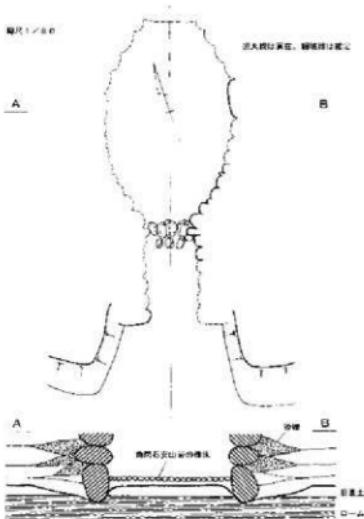
利根川流域タイプから一定の影響を受けている証左の一つとなろう。

⑧の石室裏込めの問題も示唆的である。荒川中流域の横穴式石室は、一般に地質的条件も相まって砂礫を裏込めに使用している。また、裏込めの砂礫を被覆する控え積みと呼ばれる石積みも多く、これについては児玉・藤岡地域の模様積石室に一般的である事から(水井2005aなど)、その影響とみて間違いないだろう。なお模様積石室では、裏込めが時期を経るに従って控え積みを欠き、砂礫の使用量も少なくなる傾向があり(水井2005bなど)、裏込めの薄い本古墳の石室は一見新しい様相とも思える。しかし鹿島古墳群では、埴輪を伴い調査古墳中で最も古いと目される1号墳で石室裏込めが薄く控え積みが無かったり、反面後出する24号墳に明確な控え積みが存在していたりする。つまり荒川扇状地タイプの石室では、裏込めを重厚かつ控え積みを伴う藤岡児玉タイプ(模様積石室)の影響が強い系統と、裏込めが薄く控え積みを欠く系統の2系統が存在する事になり、本墳の石室は後者に該当する。

⑨は特に前庭部壁に石積みを伴わない点が注意される。後期後半に至り横穴式石室前の儀礼行為が重要視されていく傾向を考慮すれば、前庭部壁が石積みを伴わない簡素な構造である点は、未発達な段階にあるという解釈もあり得る。しかし本墳より明らかに先行する三ヶ尻古墳群の林4号墳(やねや塚古墳・6世紀末、小久保ほか1983)では定型化した石積みの前庭部を作っているので、本墳の場合は荒川から遠いという地理的条件や階層に歸する問題と考えられる。なお、やねや塚古墳は荒川に近く、多量の河原石による葺石を備えている。

なお、荒川との距離等、立地的には本墳と類似する籠原裏古墳群は、出土遺物からは確実に本墳に後出する事例であるが、ほぼ全ての古墳で石積みによる前庭部を備えている。これについては先に指摘したように、儀礼行為が重要視されていく中で前庭部の必要性が高まった結果と評価できるだろう。

前庭部前面の葺石状の石積みについては、周辺地域では類例を聞かないものなので、単に閉塞石を搔き出した形跡とも考えられる。



第21図 木の本3号墳石室復元図(模式)

以上、木の本3号墳の横穴式石室について、各部の構造的特徴を簡便ながら検討し、事実記載を補足した。以上の検討を踏まえた上で復元される本墳の横穴式石室は、上掲の第21図に示す様な構造であったと推定される。

(2) 荒川扇状地タイプの横穴式石室

今回報告する木の本3号墳は、前節での検討からは一部に利根川流域の影響も認められたが、側壁の構築石材からは前節で提唱した荒川扇状地タイプに含まれるものである。

本節では荒川扇状地タイプの石室を広く取り上げ、形態分類にもとづいた変遷観を提示し、木の本3号墳の位置づけに替えてみたい。また、荒川扇状地タイプと他のタイプの分布圏についても触れ、石室構造に見える地域圏を素描してみたい。

荒川扇状地タイプの定義と分類

定義 ここで分析対象とする荒川扇状地タイプの横穴式石室とは、荒川の河原石を使用した横穴式石室を広く包括するものである（註7）。

極めて難い定義である為、時期・地城等の要因によって様々な形態が存在している事は容易に予測されるところである。しかしこれは一つの作業仮説として、石材の種類毎に石室構造に携わる集団が存在する可能性を考えている為であり、石室形態と石材の相関性から、石室構築を含めた古墳建築者集団と、発注者である被葬者の関係を問題化し、地域史研究の一視点として俎上に上げる必要があるとの認識に立ったものである事を予め断っておく。

分類 本来ならば立面形態も含めて分類すべきだが、検討対象となる石室の多くが上半を欠損するケースである為、ひとまず平面形態による分類とし、奥壁や袖部の構造や裏込め・堀形の有無等から細分する。（分類については第22図を参照）

A類：無袖式で狹長な平面形態をメルクマールとする。深谷市小前田古墳群9・10号墳、同市の黒田古墳群3・6・7・8・9・10・11号墳が相当する。

側壁は基本的に河原石を小口積みにするが、小前田古墳群では奥壁に接する基底に大形石材を使用する特徴があり、奥壁は残存する全てが大形の石材を2段以上上積んだものである。裏込めは、記録化されている小前田古墳群の2基では、いわゆる控え積みと呼ばれる裏込めの砂礫を被覆する構造で、黒田古墳群も報告書の写真からは同様の裏込め構造と判断できる。構築面は、小前田古墳群では全て旧地表面の直上であり、黒田古墳群も石室の床面レベルからは旧地表面への構築と判断される。以上の点から、本類は、群集墳単位で側壁の構造に多少の差異はあるが、形態・構造・構築方法の似通った一群で、強い共通性をもっていると言えよう。

B類：片袖式で、むしろL字形石室と呼ぶべきものである。深谷市黒田古墳群4号墳の一例のみで、右側壁に大型石材を使用する点からは、本類はA類をL字状に屈曲させたものとも理解される。

C類：袖部がかなり不明瞭で、両袖式と無袖式の中間的なもので、玄室平面形がA類に比べて幅広で、弱い胴張りを呈する点をメルクマールとする。

深谷市では小前田古墳群内稻荷塚古墳、見目古墳群1号墳、塙原古墳群1・3号墳、熊谷市三ヶ尻古墳群のやねや塙古墳、石原・坪井古墳群の薬師堂古墳が相當する。

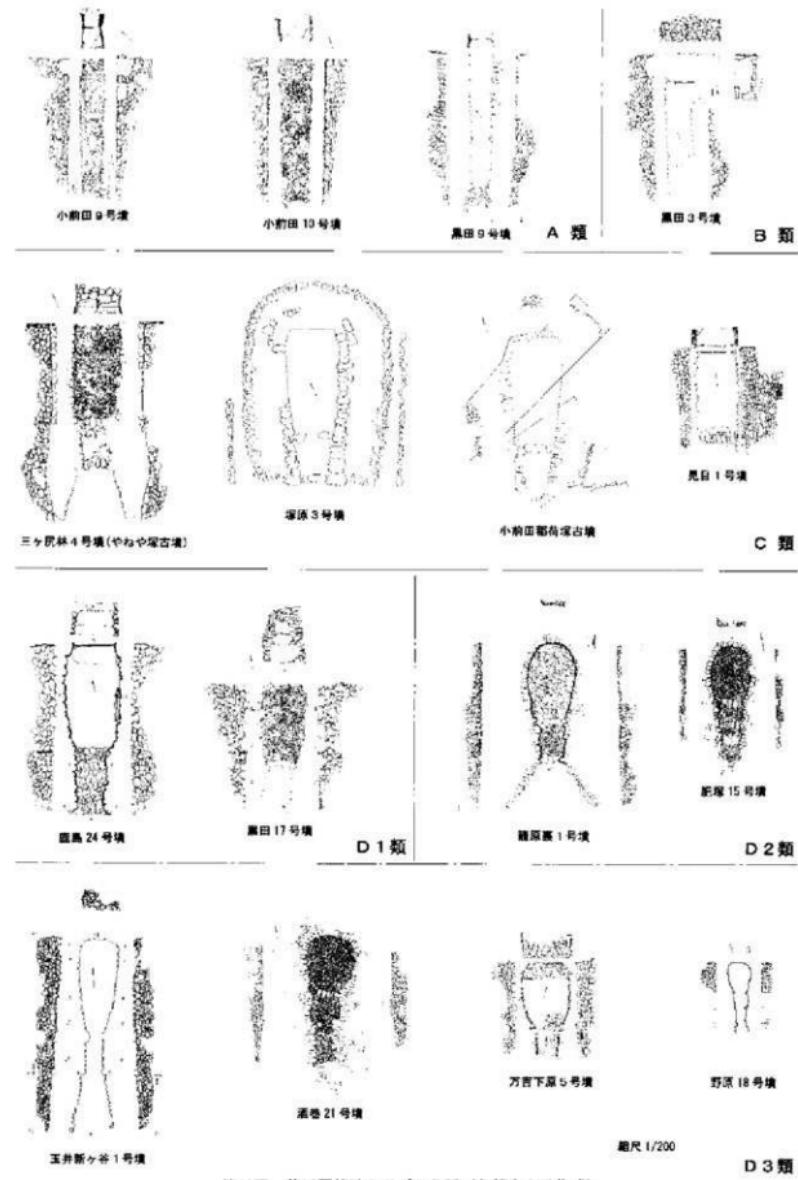
側壁は全体に大きさの揃った河原石を小口積みに、奥壁は側壁よりは大振りの河原石を小口積みしたもののが基本となるが、唯一見目1号墳がその玄室幅をカバーする緑泥片岩の1枚石である。袖部は基本的に平面的には不鮮明で、無袖とすべきA類に類似した状況であるが、薬師堂古墳では緑泥片岩の玄門が設置され、後述するD類に多い構造である。A類とD類の中間的なものを含む特徴があるが、裏込めはその様相が明らかな事例の全てが控え積みを伴っており、築造面も旧地表面上で共通する。

D類：両袖式で里室・平面胴張りの玄室をメルクマールとし、玄室平面が徳利形で胴張りが弱く奥壁の明瞭なD1類と、小判形で胴張りが強く奥壁不鮮明なD2類、その他例外的な形態をD3類とする。

D1類としては寄居町樋ノ下古墳群6・15号墳、深谷市小前田古墳群1号墳（中小前田2遺跡）、黒田古墳群17号墳、見目古墳群2号墳、鹿島古墳群9・12・13・15・24・34号墳の計11例が確認できる。

側壁は河原石を小口積みにし、隙間に小縫が補助的に用いられ、模様積と言われる藤岡児玉タイプに類似する。奥壁には大形石材を数段積み、袖部は黒田17号墳では大振りの河原石をせり出させ、縦に目の通る構造だが、その他の事例では緑泥片岩の玄門がはめ込まれる構造である。裏込めは砂礫を使用し基本的に控え積み、構築面は判明する調査事例が少ないが、黒田17号墳では旧地表面上、樋ノ下古墳群6・15号墳では浅い堀形を伴っているが、不明な事例については石室床面レベルから大半が旧地表面上に構築されているものと判断できる。

D2類としては今回報告する木の本3号墳をはじめ、深谷市小前田古墳群3・4号墳、黒田古墳群20号墳、箱崎古墳群1・2号墳、鹿島1・5～8・11・16



第22図 荒川扇状地タイプの分類（各報告より作成）

～23・25～27、熊谷市三ヶ尻古墳群林1号墳、龍原裏古墳群1～4・8号墳、広瀬古墳群熊商校内所在古墳、肥塚古墳群14・15号墳、野原古墳群17号墳、立野古墳群11・13・15号墳の計35例が確認され、D2類の主体をなすことは明白である。

側壁は河原石を小口積みに、奥壁は側壁と一体化する構造が基本であるが、鹿島古墳群では大振りな石材を鏡石的に設置する例が集中する。袖部は大半が緑泥片岩の玄門をめ込む構造であるが、河原石を縦に目を通して積む構造も少数認められる。裏込めは砂礫を基本とするが全体にその使用量が少なく、龍原裏古墳群では直接埴丘の盛土が覆うような状態である。控え積みを伴う事例については、現状では確認できない。構築面は判明する調査事例が少ないが、浅い堀形を伴う事例が大半である。

D3類は上記D1類とD2類の双方に該当しないものであるが、注目すべき例が存在するので以下に紹介する。熊谷市の玉井古墳群中の新ヶ谷戸1号墳は、奥壁構造ではD2類に近いものの玄室の平面形態が小判形とならない狭長なもので、角閃石安山岩の加工石材を使用する利根川流域タイプに多いものである。同市の万吉下原古墳群5号墳も玄室の平面形態がやや特異なもので、これについては近傍の凝灰岩切石を使用する比企丘陵タイプの瀬戸山古墳群薬師寺1号墳が類似する平面形態である。行田市酒巻古墳群21号墳は奥壁構造からは完全なD2類であるが複室構造で、これについては同一古墳群中の酒巻1号墳が利根川流域タイプの複室構造で、やや下流に位置する同タイプの羽生市小松1号墳も複室構造なので、これらとの関係で理解される。熊谷市野原18号墳は玄室がD2類と判断されるものだが、前室が凝灰岩切石を使用したもので、比企丘陵タイプと半々という特異な特徴をもつ。

なお、以上のD3類とした例は、地理的には荒川扇状地の外縁ないしはその外に位置し、既に前段でも触れているが他タイプ石室との関係が強い。言い換れば影響を受けたものと言えよう。

荒川扇状地タイプ各類の年代観

次に上記の都合5種類に対し、遺物等から時期の明

らかな事例を抽出し、各類の年代観を求めたい。

A類は全て埴輪を樹立する古墳なので、6世紀代である事は確実である。土器から時期の明らかな例としては、黒田3号墳と6号墳で石室内からM.T15～TK10型式に比定される須恵器が出土しており、遅くとも6世紀第2四半期には築造されていたと考えられる。また小前田9号墳ではTK10型式模倣の土師器甕が4点窓道部から出土し、6世紀の中葉には築造されていた事を示している。以上からA類は、6世紀前半～中葉の時期が与えられる。

B類は黒田4号墳1例のみ、埴輪樹立古墳である。石室内から出土した無脚半球形の雲珠は6世紀前半にほぼ限定されるとの見解がある（坂本美夫1985）ので、B類はA類と同時期と考えられる。

C類は全て埴輪を樹立し、土器を出土した三ヶ尻やねや塙古墳では須恵器4点が前底部付近から出土しており、型式学的検討によって6世紀第4四半期とされている（利根川1987）。他の古墳は出土遺物に細かい年代を示すものが乏しく不確定要素はあるが、逆説的に石室自体の形態も加味すれば、C類は6世紀後半から埴輪樹立の停止される7世紀初頭までの時期が与えられ、時期的にはA類に後続する。

D1類は黒田17号墳と小前田1号墳で埴輪が伴っており、その形態特徴から6世紀末の時期が与えられる（註8）。それ以外は埴輪を伴わず7世紀代に降るが、時期を示す土器の出土が少なく、樋ノ下15号墳で7世紀第3四半期に比定される猿投産フラスコ瓶が出土している程度である。根拠は弱いものの、D1類は6世紀末～7世紀後半の時期が与えられるだろう。時期的にはC類と重複しつつ後続する。

D2類は鹿島1号墳が埴輪を伴い、D1類の黒田17号墳や小前田1号墳と同じ6世紀末の時期が与えられる。それ以外の埴輪を伴わない事例はD1類同様に7世紀に下るが、土器の出土が殆どなく、時期判定が困難である。ただ副葬品に薬手刀（熊商校内古墳）や方頭大刀（龍原裏1号墳）をもつ例がある点や、全体に副葬品が僅少な例が主体となる点から、D2類はD1類と平行するが、副葬品からは本類の方がより新しい時期に主体を置くものと考えられる。

	500	550	600	650	700
A類		—	—		
B類		—	—		
C類		—	—		
D1類		—	—	—	—
D2類		—	—	—	—
D3類		—	—	—	—

第7表 荒川扇状地タイプ各類の消長関係

D3類は酒巻21号墳が埴輪を伴いMT85段階の須恵器が石室前から一括出土しており、6世紀第3四半期に位置づけられ（坂本1996）、胴張りプランとしては関東地方でも最古段階である。玉井新ヶ谷戸1号墳は前庭部付近から東海産の須恵器が出土しており、報告者は7世紀第1四半期としている。万吉下原5号墳は埴輪を伴わないが、前庭部から南北企進の須恵器が出土しており、その特徴から6世紀末頃の年代が与えられる。野原18号墳は時期を決定できる遺物の出土が無いが、複室構造という点から報告者は7世紀代でも遡るとしており、ここでは7世紀前半の時期を与えた。

荒川扇状地タイプの変遷と系譜

次に先の検討で導かれた各タイプの年代観にもとづき、変遷と系譜について触れておきたい。

荒川扇状地タイプの横穴式石室は、今回A類とした無袖式で狹長な類型に始まり、当該地域における横穴式石室の事実上の導入期となる。またB類とした片袖式でL字状の類型も同時期に位置づけられるもので、北武藏の群集墳における導入期の横穴式石室が、無袖式中心に片袖式を含むという傾向と一致する（増田逸郎1989など）。なお、A・B類の類例は神川町青柳古墳群等の児玉郡下の群集墳に多く認められ、上野西部における群集墳も同様の様相を呈しているので、北関東における普遍的現象の一環と考えられる。一方でC類は、時期に若干の断絶はあるものの平面形態はA類からの連続性が強い。石材の積み方や裏込めの控え積み、構築面に至るまでA類と一致する点は、C類がA類の定着と発展によって成立した事を示している。

続くD類は、胴張りプランが採用されるという点で一つの画期である。地域的には当該地域の外縁に位置

する酒巻21号墳が最古だが、例外的なものを便宜上括したD3類であり、後のD1類・D2類の成立との間に時間的断絶も認められる事から、利根川流域タイプの範囲で捉えておきたい。

結論から言えば眞の画期はD1類とD2類の成立する6世紀末で、その成立当初からD1類とD2類の二系統並存という特徴がある。これについては、D1類が平面形態や側壁と裏込めの控え積みから藤岡兒玉タイプ（模様積石室）の影響下にある系統、D2類は特に奥壁の特徴から利根川流域タイプを志向した系統と理解できる。後述するがD1類は藤岡兒玉地域に近い荒川の上流寄り、D2類は荒川と利根川の両水系の乱流地帯を中心に分布しており、これを補強する。ただし両類は、例えば鹿島古墳群等では混在し、奥壁構造に折衷的な様相（例えばD2類の平面形態だが奥壁に大形石材を使用する点）が多く見受けられ、同じ石材を使う系統として互いに深い関係性が存在していたものと推察される。

荒川扇状地タイプの分布

既に荒川扇状地タイプについて、個別の事例について取り上げ検討してきたが、ここでは改めてその分布に触れる。言い換えれば荒川の河原石を使用した横穴式石室が、地理的・地質的にどのような範囲に分布しているのかを示しておきたいと思う。

荒川扇状地タイプの定義は、本節の冒頭で述べたように、広義には単に荒川の河原石を使用するという要素のみである。つまり使用石材が荒川起源なのかという疑惑も生みかねない面がある。従って後追いであるが、ここで北武藏地域における他の石材を使用する石室タイプを列挙解説し、荒川流域タイプの自立性を確認しておきたい。

利根川流域タイプは既に度々触れてきたが、榛名山二ツ岳形成期の火山性噴出物である角閃石安山岩の転石を加工して側壁とするもので、利根川中流域の群馬・埼玉に分布し、一部は栃木南部・茨城西部に及ぶ。早くに尾崎喜左雄氏が着目し（尾崎1966）、右島和夫氏が再検討している（右島1993）。前方後円墳では五面削り加工で玄室が短冊状の直線胴、円墳では四面削りで玄室が隅丸短冊形の胴張りが多く、階層ごとに使い分ける指摘もされているが、他の石材タイプとの関係を窺わせる形態も多く、実情としてはかなりの多様性を内包していることが想像される。

藤岡児玉タイプは模様積石室とも呼ばれ、結晶片岩の棒状化した小転石と、大振りな河原石等をモザイク状に組み合わせて積んだ側壁を特徴とし、結晶片岩の分布と重複して藤岡市から児玉郡市にかけて分布している。早くに増田逸郎氏が注目して検討を重ね（増田1977a・1996）、志村哲氏（志村1998）や筆者（永井2005a）も再検討した。一部例外を除き三味線形の胴張りで、大半が相似の平面形態となる。また、前方後円墳では今のところ一例も確認できず、円墳の階層で普及したタイプと考えられる。

比企丘陵タイプは、凝灰岩の加工石材を使用するもので、東松山市を中心に、南は川越市、東は行田市から桶川市・さいたま市まで、北は概ね熊谷市の南部まで広い分布を示す。早くから金井塙良一氏が注目し（金井塙1980）、最近では草野潤平氏によって再検討された（草野2008）。割石的一面を削った程度の石材を小口積みしたものと、ブロック状の石材を縦位に切組積みするものがあり、主体となるのは後者である。加工度合いの低い前者は、前方後円墳では方袖式で円墳は無袖式、後者は大半が複室の胴張りで、少数派だが單室両袖で胴張りの系統もある。

その他のタイプとしては、房総半島の石材を使用する埼玉将軍山古墳、角閃石安山岩・緑泥片岩・凝灰岩を使用した八幡山古墳、緑泥片岩のみで構築される小見真願寺古墳があるが、前方後円墳ないしは大型円墳といった首長墓の事例であり、石室自体も直接の対比は出来ない超越したものである。

第23図では荒川扇状地タイプの分布と、各タイプの

分布を示した。左下の概念図を見ると明白だが、荒川扇状地タイプの分布域はかつての荒川の流路と氾濫源（註9）をカバーしている。また、他3タイプの分布域と重複ないしは近接していることも判明し、系譜の検討で想定した各タイプからの影響関係について、地理的にも可能性が高い事を確認できる。

木の本3号墳の位置づけ

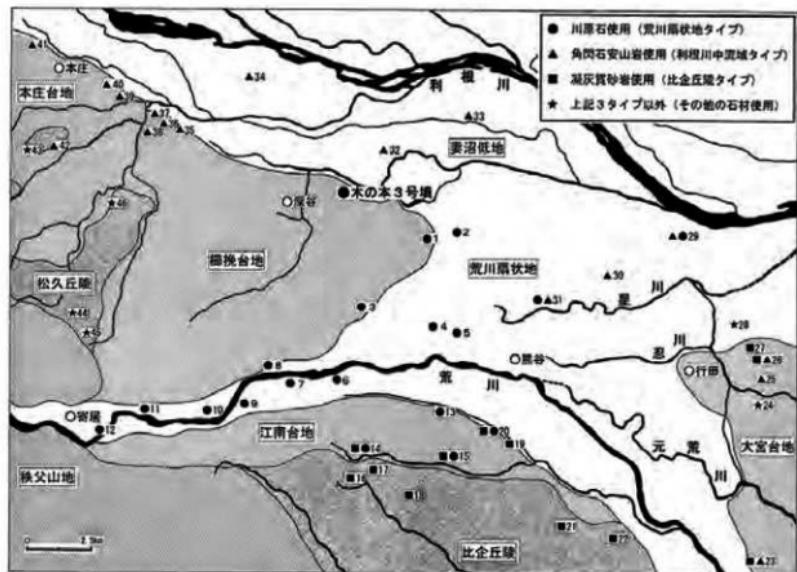
最後に、本章の目的である木の本3号墳の石室の位置づけについて、繰り返す部分もあるがこれまでの検討を踏まえて整理しておきたい。

木の本3号墳の石室は、特にその玄室の平面形態から、本節における分類のD2類に相当すると判断される。ただ、D2類において一般的な緑泥片岩による玄室を欠いている点は、あるいは先行するC類に近い様相とも理解できるので、D2類でも比較的古い段階の所作と考えたい。從って木の本3号墳の石室は、年代的には7世紀前半に位置づけられることは概ね異論の無いところであろう。

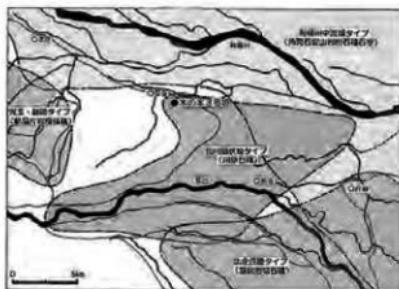
また、荒川扇状地タイプであるにも係わらず床面に角閃石安山岩の玉石を敷く点、石室構築面の状態からは、利根川流域タイプの間接的な影響を受けているものと判断される。第23図に示した各タイプの分布域や石材の運搬距離等の地理的条件を考えれば、むしろ木の本3号墳は利根川流域タイプであっても全く問題ないので、言を替えれば荒川扇状地タイプである必然性があったと考えられる。それは一重に、被葬者の社会的関係の象徴であるからに他ならず、やがて来る輔羅郡の設置という歴史上の画期を考えようとする時、今回の検討によって明らかとなった荒川扇状地タイプの分布域は、輔羅郡の郡域認定について考える際、重要な知見となろう。

おわりに

荒川扇状地タイプの設定と変遷・分布等を検討し、木の本3号墳石室について位置づけを試みた。いささか本題から離れて冗長となった感は否めないが、横穴式石室から地域史を描こうとする際の、一つの通過点



関係古墳分布図



横穴式石室各タイプの分布範囲概念図

1. 緑野西古墳群	24. 泽玉田山古墳
2. 三井山古墳群	25. 白山古墳
3. 三ヶ所古墳群	26. 小幡山古墳
4. 鹿島山古墳群	27. 鹿島山古墳
5. 丹沢山古墳群	28. 小笠原野山古墳
6. 桜木山古墳群	29. 道香古墳群
7. 佐久古墳群	30. 半木大山古墳
8. 田代西古墳群	31. 伊勢西古墳群
9. 田代東古墳群	32. 上田山古墳群
10. 萩原古墳群	33. 鶴沼古墳群
11. 下野市古墳群	34. 下野赤木西古墳群
12. 保土下古墳群	35. 保土出山古墳群
13. 上野寺古墳群	36. 千葉郡西山古墳
14. 丹波古墳群	37. 丹波古墳群
15. 野村古墳群	38. 幸田古墳
16. 古法古墳群	39. 本郷下山古墳群
17. 佐久古墳群	40. 佐野山古墳群
18. 佐野山古墳群	41. 佐野山古墳
19. 鹿島山古墳群	42. 鹿島古墳
20. 大原下山古墳群	43. 大原下山古墳
21. 三ヶ所六角形	44. 田代北山古墳
22. 大原南古墳群	45. 田代南古墳
23. 寺尾古墳群	46. 田山古墳群

関係古墳一覧 (番号は上図に対応)

第23図 荒川崩状地タイプの分布

であるとご理解頂きたい。

また、今回取り上げた荒川崩状地タイプのような、地域性の強い石室が認定できる背景には、当然石室の構築に特化した専門集団を想定すべきであろう。

彼らに石室形態の選択権まで委ねられていたのか否

か、集団の社会的位置や相互の関係性など、派生する問題は山積である。これについては、報告書の考察の枠を超えた話となるので、稿を改めて検討を重ねていきたいと思う。(永井)

付記

報告原稿を一通りまとめ終わった平成19年11月、本古墳の調査を手伝ってくれた福田桂子さんの訃報に接した。享年25歳。早稲田大学大学院で須恵器を専門としていた彼女と、木の本3号墳の現場テントで出土したばかりの不可思議な土師器甕を観察し、意見を交わした事が昨日の事のようである。

思えば平成17年の夏に市内藤沢公民館で行った土器作り教室の際、早稲田大学実験考古学サークル「巧の会」の一員としてボランティア参加したのを契機に深谷との縁が生まれ、以来何度か現場を手伝いに足を運んでくれた。19年4月からは横浜市役所への就職も決まり、社会人としても研究者としてもこれからという矢先、病に倒れ半年以上の闘病生活の末、彼女は旅立った。調査関係者一同、本書を彼女の靈前に捧げることで哀悼の意を表したい。



木の本3号墳にて（左側が福田さん）

註

(1) 銅鏡を出土する横穴式石室を有する古墳としては、近畿では深谷市小前田9号墳（瀧瀬1986）、同黒田11号墳（塙野ほか1975)、熊谷市石原・坪井古墳群中の藻師堂古墳（熊谷市史編纂室1984)、三ヶ尻古墳群中のやねや塚古墳（三ヶ尻林4号墳、小久保ほか1983)、塙古墳群中の西原18号墳（江南町1995)等が知られ、小前田9号墳が6世紀前半代に遡るもの、他は6世紀末～7世紀初頭の円墳であり、時期や墳形に偏りがある。木の本3号墳もまた、こうした銅鏡出土古墳と同列に考えて良いのなら、必然的に7世紀でも新しくない時期を想定する根拠にはなる。但し追跡による可能性を含む事は言うまでもない。なお、時期的にはやや遅くと思われる深谷市四十塙古墳群出土品や熊谷市甲山

出土品（塙野2004）の鉈鏡も含めれば、北武藏の後期古墳において銅鏡・鉈鏡は普遍的な副葬品と考えて良さそうである。とはいへ埴輪規模や共作副葬品から見れば、銅鏡出土古墳は各々の古墳群中では「主墳的存在」と考えられ、一定の階層を示していると理解されると共に、被葬者が女性である可能性や特定の職業、出自も念頭におくべきかと思う。

(2) 木の本古墳群中でも櫛山神社東方の社前遺跡周辺の一群（社前支群）は、近年発掘調査が進み、多数の古墳跡が発見されている。詳細は報告書の刊行を待つべきだが、出土埴輪の特徴や組成が5世紀末～6世紀前半の様相を示し、木の本10号墳（さきだま資料館1993)のようなようなり出し付き円墳を核に小規模な円墳が密集する群構成が見え始めており、将来的には大規模な古式群集墳として評価される可能性が高い。また類似の様相は古墳群東端の幡羅遺跡北方の一群（下矢台支群）にもあり、近年の調査によつて5世紀末に遡る円墳が複数確認されている（青木・水井2006・知久2007）。つまり木の本古墳群築造の契機が、幡羅台地北縁に累々と造られた古式群集墳であったと考えられるのである。なお6世紀未頃に至って横穴式石室を有する古墳（木の本1・2号墳が可能性高い）が出現するが、これらは古墳群中央の一群（木の本支群）や、実施は良く解らないものの古墳群西端の一群（城西支群）がこれに相当し、新式群集墳として先の社前・下矢台支群といった古式群集墳とは、やや立地を変えているようにも見える。以上の点はまだ古墳から見た現象であり、造営主体と考えられる台地上に展開する集落遺跡との突き合わせが急務であろう。木の本古墳群とその周辺遺跡群は、地域開発と群集墳の関係が具体的に語れる、格好のフィールドに変貌する可能性を秘めている。

(3) 本墳の石室は、本墳が近世段階に屋敷地の一部に取り込まれた際、恐らく石抜きを主目的とした破壊を受けている。その際に採取されたと思われる多数の石材は、現在も居住者の居る屋敷地内の東端に集積している。しかし事実関係について聞き取りした証では無い為、侵測の域を出ないことはお断りしておこう。

(4) 未報告であるが、調査担当の江南町教育委員会（当時）の森田安彦氏と駒沢大学酒井清治教授の高配によって調査現地を見学させてもらった際に確認した。しかし類例としてはこれ以外には見いだせなかつたので、1つの系統である可能性は指摘しうるが偶然の一例である可能性も否定できない。いずれにせよ類例の増加を待ちたい。

(5) 6世紀後半（MT85型式期）と推定される噴火を指し、H-IやI-Pと俗称されるもので、大きさは2回目の噴火に相当する。噴火の時期については、坂本和復氏による検討を参考とした（坂本1996)。

(6) 未報告であるが、調査担当の伊勢崎市教育委員会須永泰一氏と勢藤力氏の高配によって調査中の現地を見学させてもらった。なお石室関係の図は「群馬県の横穴式石室II」に掲載されている（群馬県考古学研究会1999)。

(7) 塙野博氏は荒川中流域に分布する群集墳の横穴式石室を検討し、石室平面形態が概ね短冊型から胴張りへ変遷する事を指摘している。今回分析対象とする荒川扇状地タイプは、塙野が対象とした範囲を拡大解釈したもので、先行研究として参考とした部分も多い（塙野1992)。

(8) 北武藏における埴輪樹立の終焉については諸説あるが、ここでは暫定的に6世紀末と考える。

(9) 荒川はかつて利根川に合流していた時期もあったようで、星川や忍川はその名残と考えられる。逆に利根川が荒川に流れ込んでいた可能性もある（塙野・中島1997など)。

参考文献

（直接引用していない報告書は削除させて頂いた）

- 青木克尚・永井智賀2006『幡屋遺跡』深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第75集 深谷市教育委員会
- 青木敬2005「後・集末期古墳の土木技術と横穴式石室・群集墓施造における畿内と東国ー」『東国史論』第20号 群馬考古学研究会
- 秋池武2000『利根川流域における角閃石安山岩転石の分布と歴史的意義』『埼玉県立歴史博物館紀要』第21号 群馬県立歴史博物館
- 新井端・森田彦彦2005『立野古墳群発掘調査報告書』江南町埋蔵文化財発掘調査報告書第14集 埼玉県大里郡江南町教育委員会
- 池上信也ほか2008『原野古墳群発掘調査報告書』立正大学考古学会
- 石塚三夫1997『小前田II遺跡(第4次、第5次)・小前田3号墳』寄居町遺跡調査会報告第14集 寄居町遺跡調査会
- 岩田正明ほか1994『福ノ下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第135集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 尾崎義左雄1966『横穴式古墳の研究』吉川弘文館
- 金井邦良-1976『北武藏の古墳群と渡来系氏族古土氏の動向』『北武藏考古学資料図鑑』校倉書房
- 川本町1989『川本町史』通史編 川本町
- 草野潤平2008『埼玉県における切石積石室の地城相』『埼玉考古』43 埼玉考古学会
- 熊谷市史編纂室1984『熊谷市史』通史編 熊谷市
- 黒沢教大1982『岡部村平坂古墳遺跡調査報告』『あゆみ』第12号 埼玉県立深谷商業高等学校地歴研究部
- 群馬県古墳時代研究会1990『群馬県内の横穴式石室Ⅱ』(東毛編) 群馬県古墳時代研究会
- 江南町1995『江南町史』資料編I 考古 江南町
- 門脇伸一ほか1994『酒巻21号墳(2次)・白山岩山古墳(1・2次)・白山2号墳』行田市埋蔵文化財発掘調査報告書第30集 行田市教育委員会
- 古池裕祐ほか1991『明戸・南部遺跡群』1 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第29集 深谷市教育委員会
- 小久保義ほか1983『三ツ尻天王・三ツ尻林』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第23集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 埼玉県1982『新編埼玉県史』資料編2 原始・古代・弥生・古墳 埼玉県
- 酒井清二1984『田耕地(II)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第33集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- さきたま資料館1997『木の本10号墳』『古墳詳細分冊調査概報』3 埼玉県教育委員会
- 坂本和俊1996『埼玉古墳群と无鄰寺国造』『群馬考古学手帳』6 群馬県土器総会
- 坂本美夫1985『追金具・雲珠考』『研究紀要』2 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 菅谷浩之ほか1991『万吉下原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告第18集 埼玉県教育委員会
- 知久裕昭2007『國立(2次)・森吉古墳/下郷』深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第92集 深谷市教育委員会
- 鳥羽利之ほか2003『西四つ塚遺跡』岡部町遺跡調査会報告書第2号 岡部町遺跡調査会
- 鍛瀬秀之1988『小前田古墳』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第58集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中直明1989『縁配片岩を運んだ道へ変容する在地首長層と労働者発掘』『土曜考古』第14号 土曜考古学研究会
- 塙田良道・中島洋一『真名板高山古墳の再検討』『行田市郷土博物館研究報告』第4集 行田市郷土博物館
- 利根川章彦1982『新ケ谷P』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第9集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 利根川章彦1987『やねの塚と新ヶ谷P』世紀の北武藏における村落首長層に関する考古学的検討』埼玉県立博物館紀要13 埼玉県立博物館
- 塙野博1992『見目古墳群との出土遺物』『埼玉考古』第19号 埼玉考古学会
- 塙野博1992『荒川中流域沿岸の古墳について-横穴式石室の変遷-』『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 塙野博2004『埼玉の古墳』[大刷] さきたま出版会
- 塙野博ほか1972『鹿島古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査報告第1集 埼玉県教育委員会
- 塙野博ほか1973『黒田古墳群』黒田古墳群発掘調査会
- 水井智賀2005a『関東地方北西部における横穴式石室の地域性』『横穴式石室からみた鶴尾の地域社会』勢濃尾研究会
- 水井智賀2005b『第V章 宮内古墳群の提起する問題』『脊呂古墳遺跡』児玉町遺跡調査会報告書第19集 埼玉県児玉町遺跡調査会
- 長谷川勇男ほか1978『埼玉県立本庄市御手長山古墳発掘調査報告書』本庄市教育委員会
- 増田透郎1977『まとめ』『環日本山古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査報告第10集 埼玉県教育委員会
- 増田透郎1977『模様積石室小考』『調査研究報告』第9号 埼玉県立さきたま資料館
- 増田透郎1989『埼玉県における横穴式石室の受容』『1910年三月シンボジウム』東日本における横穴式石室の受容』群馬考古学研究所ほか
- 増田一裕1990『本庄遺跡発掘調査報告書IV-御手長坂第2号塚の調査-』本庄市埋蔵文化財調査報告書第18集 本庄市教育委員会
- 松田哲2001『肥塚中遺跡・出口上遺跡・肥塚古墳群14・15・16号墳』平成12年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書 熊谷市教育委員会
- 松田哲2005『龍原裏古墳群』平成16年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書 埼玉県熊谷市教育委員会
- 右島和夫1993『角閃石安山岩削石積石室の成立とその背景』『吉文化論』第30集(下) 九州古文化研究会
- 村松聰2004『鹿島古墳群』川本町発掘調査会報告第10集 川本町遺跡調査会
- 村松聰2005『鹿島古墳群』川本町発掘調査会報告第11集 川本町遺跡調査会
- 森田慶彦2006『上原原遺跡第2次発掘調査報告書』江南町埋蔵文化財発掘調査報告書第15集 埼玉県大里郡江南町教育委員会
- 若松良一1982『葛藤天王山塚古墳の造営時期と被葬者の性格について』『土曜考古』第6号 土曜考古学研究

考察2 木の本3号墳出土遊離歯

長谷川清一(春日都市教育委員会)

1. はじめに

市指定史跡である木の本3号墳は、埼玉県深谷市大字原郷字木ノ本1,975番地に所在する。

妻沼低地を北に臨む櫛挽台地寄居面の北縁に位置し、東西に広い木の本古墳群の中央、台地崖線からやや奥まった平坦面上に立地する。

本古墳群は円墳主体だが、中には10号墳のように帆立貝型古墳も存在し、5世紀末以降に形成されたと考えられている。

発掘調査は、平成18年2月13日から平成18年3月29日にかけて、古墳の範囲を確認するための学術調査を深谷市教育委員会が主体となって実施された。現況は雑木が生い茂る山林となっている。調査面積は約900m²である。

調査の結果築造時期は7世紀前半と考えられ、円墳(墳丘)の規模は直径20m、高さ4mを測る。胸張の小判形を呈した横穴式石室の玄室からは、鐵鎌、銅鎌、直刀の破片、耳環などとともに被葬者の歯が出土した。また、前庭部からは単獨で土師器の甕(7世紀第2四半期)が、ほぼ完形で出土した。本報告は、これらのうち、歯に関するものである。

2. 出土状況

出土した歯は、玄室の入口から奥壁にかけての床面縫の隙間からである。歯は石室内を簡易に区割りし、一括して取り上げられている。

重複する歯の存在からは追葬を示唆させるが、後世の小動物や近世の石抜きによる擾乱を受けているので、合葬なのか追葬なのかを決定づけるには不十分な状況である。他に若干の骨片が出土しているが、詳細

は不明である。

また、調査時に付した石室内の簡易地区割りについては、調査から整理までの間に行方不明となってしまい、現時点ではその出土位置についての検討が不可能である。(調査担当者談)

3. 出土した歯の特徴

本古墳で出土した歯は、以上のような制約をもつ資料だが、今後石室内の地区割りが判明する可能性もあるので、取り上げ単位を尊重して便宜上の通し番号を付し観察を行った。

なお、咬耗度は、B.Holly Smith (1984) を使用した。石室1区からは、3本の歯が出土している。1は、下顎右第二大臼歯である。咬合面にはH型の溝がみられる。咬耗度は3度である。2は、上顎右第三大臼歯の歯冠で、歯根は未形成である。咬耗はみられない。3は、下顎右第一大臼歯の歯冠で、歯根は欠損している。Y型6咬頭性を呈する。咬耗度は3度である。

石室2区からは、9本の歯が出土している。4は、下顎左第二大臼歯の頬側部が欠けた歯冠で、歯根は欠損している。咬耗度は2度である。5は、下顎右第一小白歯の歯冠で、歯根は欠損している。咬耗度は2度である。6は、下顎右第二大臼歯の歯冠で、一部歯根が残る。咬耗度は2度である。7は、上顎右中切歯(第一切歯)である。中程度のシャベル型を呈する。咬耗度は4度である。8は、下顎左第三大臼歯である。歯根は形成途中であり、近心側は楕状痕を呈している。咬耗度は1度である。9は、上顎右第二小白歯の歯冠で、歯根は欠損している。咬耗度は4度である。10は、上顎左側切歯(第二切歯)の歯冠で、唇側部のみの残存である。11は、上顎左中切歯(第一切歯)の歯冠で

あり、歯根は欠損している。舌側面には、強いシャベル型がみられる。咬耗度は3度である。12は、歯冠の一部であるが細片で、歯種不明である。

石室3区からは2本の歯が出土している。13は、上頸右犬歯の歯冠で、歯根は欠損している。咬耗度は2度である。14は、上頸の第三大臼歯の歯冠であるが、左右は不明で、歯根は未形成である。咬耗はみられない。

石室6区からは、3本の歯が出土している。他は、細片のため詳細不明である。15は、上頸左中切歯（第一切歯）の歯冠で、唇側部のみの残存である。咬耗は不明である。16は、上頸右側切歯（第二切歯）の歯冠で、歯根は欠損している。中程度のシャベル型を呈し、斜切痕がみられる。咬耗度は3度である。17は、上頸右第三大臼歯の歯冠で、歯根は欠損している。咬耗はみられない。

石室7区からは、1本の歯の出土である。18は、上頸右犬歯の歯冠で、歯根は欠損している。咬耗度は2度である。

石室B H 1の注記で6本の歯があり、他にも大臼歯片と思われる歯冠みられるが、細片のため詳細不明である。19は、上頸左第三大臼歯の歯冠で、歯根は欠損している。咬耗度は2度である。20は、上頸左中切歯（第一切歯）の歯冠で、唇側部のみの残存である。21は、下頸左第一小白歯の歯冠で、歯根は欠損している。咬頭の先端には頂窩がみられる。咬耗度は2度である。22は、下頸左犬歯の歯冠で、歯根は欠損している。咬耗度は2度である。23は、上頸右第一大臼歯の歯冠で、歯根は欠損している。咬耗度は3度である。24は、上頸左側切歯（第二切歯）の歯冠で、歯根は欠損している。弱いシャベル型を呈し、斜切痕がみられる。咬耗度は2度である。

石室最下層の注記で1本の歯がある。25は、下頸右第二小白歯の歯冠片で、近心部のみの残存である。

石室内一括の注記で歯冠の一部があるが、細片のため詳細不明である。複数の歯がみられる。

4. 考 察

《個体数について》

11、15、20の歯（上頸左中切歯）に重複がみられることから、3個体分の歯である。また、14の歯は左右不明の上頸第三大臼歯であったが、この歯が右側であれば、2、14、17と重複することになるで、この石室の被葬者は3個体分であることを支持するものである。

《年 齢》

第8表 年齢区分

年齢区分		年 齢
未成人	乳 児	1歳未満
	幼 児	1歳～5歳
	小 児	6歳～15歳
成 年	成 年	16歳～20歳
成 年	壯 年	21歳～39歳（40歳未満）
	熟 年	40歳～59歳（60歳未満）
	老 年	60歳以上

歯の咬耗状況から年齢を推定するのは非常に困難である。それは、日常生活の中で歯を使用する習慣がある場合、歯の咬耗が進行してしまうので注意が必要である。

上頸第三大臼歯でみると、2、14をもつ被葬者は歯根が形成されていないことから成年。8は歯根は形成途中であるが、咬耗がみられることから萌出しており、壮年の前半。17は歯根は形成されているが未咬耗であることから未萌出と考えられ、成年～壮年。19はすでに萌出し、咬耗度が2度であることから壮年であろう。

《性 別》

性別を示す明瞭な特徴を持った骨は出土していないが、歯の大きさから判断すると、11（上頸左第一切歯）は、他の同種の歯（15、20）と比較しても大きいことから男性であろう。しかし、15、20については歯の大きさからは判断できないため、不明としておきたい。

第9表 出土した歯からの性別内訳

	男 性	女 性	不 明	合 計
人 骨	1		2	3

《形質的特徴》

7（上頸右第一切歯）、11（上頸左第一切歯）、16（上頸右第二切歯）、24（上頸左第二切歯）にはそれぞれ舌側に咬耗がみられることから、これらの個体の咬合形式は鉄状咬合であると推測される。

7、11、16、24の歯はシャベル型を呈し、また、16、24の歯には斜切痕がみられる。これらはいずれも、シノドント型（Turner1990）といわれる形質上の特徴をもち、渡来系の影響を受けていることに矛盾はないと思われる。

5.まとめ

今回の木の本3号墳の調査は、同定の結果、重複する歯から3個体であることが判明した。この古墳の築造時期は、7世紀前半との発掘調査所見であるが、人骨の遺存状態は悪く、骨の形質からの時代的特徴をうかがい知ることはできなかったが、シノドント型の形質を持つ個体が確認されている。出土した歯から男性

が1個体、性別不明が2個体で成年～壮年にかけての被葬者である。これらの個体間における埋葬の順序、血縁関係や社会的関係に関して、現在のところ手がかりとなるものはない。

謝 辞 本稿をまとめるにあたって、鶴見大学歯学部解剖学教室講師の小寺春人氏には、歯の同定にあたりご協力いただきました。また、素稿を読んでいただき、助言を賜りました。記して、厚くお礼を申し上げます。

参考文献

- 藤田恒太郎（1999）『歯の解剖学 第22版』金原出版
B.Holly Smith : Patterns of molar wear in hunter-gatherers and agriculturalists. American Journal of Physical Anthropology 63:39-56. (1984)
Smith,B.Holly (1984) Patterns of molar wear in hunter-gatherers and agriculturalists. Am.J. Phys. Anthropol 63:39-56.
Tuner,C.G. II (1990) Major features of Sundadonty and Sinodonty, including suggestions about East Asian microevolution, population history, and late Pleistocene relationships with Australian aborigines. Am.J. Phys. Anthropol.82, 295-317.

第10表 出土した歯の観察表

出土位置	番号	説	期
石室1区	1	下頸右第二大臼歯 咬合面にはM型の溝 咬耗度は3度	
	2	上頸右第三大臼歯の歯冠 衛根は未形成 未咬耗	
	3	下頸右第一大臼歯の歯冠 衛根は欠損 Y型6咬頭性 咬耗度は3度	
石室2区	4	下頸左第二大臼歯の歯冠（頸側部欠損） 衛根は欠損 咬耗度は2度	
	5	下頸右第一一小臼歯の歯冠 衛根は欠損 咬耗度は2度	
	6	下頸右第二大臼歯の歯冠一部衛根残存 咬耗度は2度	
	7	上頸右第一切歯 中程度のシャベル型 咬耗度は4度	
	8	下頸左第三大臼歯 衛根は形成途中 近心側は桶状窓 咬耗度は1度	
	9	上頸右第二小臼歯の歯冠 衛根は欠損 咬耗度は4度	
	10	上頸左第二切歯の歯冠 翼側部のみ残存	
	11	上頸左第一切歯の歯冠 衛根は欠損 強いシャベル型 咬耗度は3度	
	12	歯冠の一部 細片のため詳細不明	
	13	上頸右犬歯の歯冠 衛根は欠損 咬耗度は2度	
	14	上頸右第三大臼歯の歯冠 左右不明 衛根未形成 未咬耗	
石室6区	15	上頸左第一切歯の歯冠 翼側部のみ残存	
	16	上頸右第二切歯の歯冠 衛根は欠損 中程度のシャベル型 斜切痕 咬耗度は3度	
	17	上頸右第三大臼歯の歯冠 衛根は欠損 未咬耗	
石室7区	18	上頸右犬歯の歯冠 衛根は欠損 咬耗度は2度	
	19	上頸左第三大臼歯の歯冠 衛根は欠損 咬耗度は2度	
石室B H 1	20	上頸左第一切歯の歯冠 翼側部のみ残存	
	21	下頸左一小臼歯の歯冠 衛根は欠損 顎窓 咬耗度は2度	
	22	下頸左犬歯の歯冠 衛根は欠損 咬耗度は2度	
	23	上頸右一大臼歯の歯冠 衛根は欠損 咬耗度は3度	
	24	上頸左第二切歯の歯冠 衛根は欠根 弱いシャベル型 斜切痕 咬耗度は2度	
石室最下層	25	下頸右第二小臼歯の歯冠片 近心部の残存	

写 真 図 版

図版 1



1. 調査地風景



2. 第1トレンチ



3. 前庭部より石室方向



4. 前庭部状況



5. 前庭部出土状況



6. 調査風景

図版2



1. 石室完掘状況（前庭側より）



2. 石室完掘状況（墳頂側より）



3. 東壁残存状況



4. 石室内遺物出土状況



5. 鉄鎌出土状況



6. 石室裏込め状況

図版3



1. 第2トレンチ



2. 第2トレンチ周壁土層



3. 第3・第6トレンチ



4. 第6トレンチ土層



5. 第4トレンチ土層



6. 第7トレンチ

図版 4



1. 第7トレンチ土層



2. 第7トレンチ出土状況



3. 第5トレンチ



4. 第5トレンチ土層



5. 第5トレンチ周堀



6. 第8トレンチ

図版 5



1. 石室内出土鉄製品



2. 古墳出土遺物 1~9

図版 6



1. 古墳出土遺物10~19



2. 古墳出土遺物20~27・36~39

図版7



1. 古墳出土遺物28~35・40~42



2. 古墳出土遺物43~52

図版 8



1. 古墳出土遺物53~59



2. トレンチ出土遺物 1~10・17・18

図版9



11



12



13



14



15



16

1. トレンチ出土遺物11~16



2. トレンチ出土遺物19

報告書抄録

ふりがな	きのもとさんごうふん							
書名	木の本3号墳							
副書名								
卷次								
シリーズ名	埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第98集							
編著者名	幾島 審、永井智教、長谷川清一							
編集機関	深谷市教育委員会							
所在地	〒366-0823 埼玉県深谷市本住町17-3 TEL 048-572-9581							
発行年月日	2009(平成21)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 (°'")	東経 (°'")	調査 期間	調査 面積	調査 原因
木の本3号墳	深谷市原郷 字木ノ本1975	市町村	遺跡	11218	020	36 19 33 139 31 09 20060213 20060329	900m ²	重要遺跡の範囲・内容確認調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
木の本3号墳	古墳	古墳後期	古墳 1基	埴輪 須恵器 土師器 鉄製品 銅製品	終末期の円墳 胴張形横穴式石室、周堀			
	集落	近世	溝 1条	かわらけ 石製品				

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第98集

木の本3号墳

印 刷 平成21年3月31日
発 行 平成21年3月31日

発 行 埼玉県深谷市教育委員会
